

陶器南遺跡発掘調査概要・V

—府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う平成9年度1区から5区の調査—



1999. 3

大阪府教育委員会

はしがき

堺市の東南部に広がる泉北丘陵上には、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器生産地であった陶邑窯跡群をはじめとして、多くの遺跡が確認されています。これらの遺跡は、1960年代半ばからの泉北ニュータウン建設やその周辺の開発により、多くの発掘調査が実施されてきました。

堺市陶器北地区でも、大阪府農林水産部（現環境農林水産部）によって、ほ場整備事業が実施されることになり、大阪府教育委員会では、計画地内にある陶器千塚古墳群の発掘調査を平成3年度から5年度に実施し、引き続き平成5年度から陶器南遺跡の発掘調査を継続して実施しています。既往の調査では、古墳の周濠や、古墳時代、奈良時代の須恵器生産に関連したと思われる人々の集落跡、中世の居館跡や土地の開発状況を確認することができました。

本書は、平成9年度に調査を実施したうちの1区から5区までの調査成果をまとめたものです。この調査では、これまでに比べて広い面積の調査を実施したことにより、古墳時代、奈良時代の須恵器生産に関連したと思われる人々の集落跡が大きく広がっていることが確認でき、本遺跡の全容を明らかにする一助とすることができました。

今回の調査に際してご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係各位、諸機関に厚く感謝いたしますとともに、今後とも大阪府における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成11年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

例　　言

- 1 本書は、平成9年度に実施した、府営は場整備事業「陶器北地区」予定地内、堺市陶器北に所在する陶器南遺跡の発掘調査のうち、平成10年度に遺物整理事業を実施した1区から5区までの発掘調査概要である。
- 2 本事業は、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が実施した。
- 3 現地調査は、調査第1係技師 竹原 伸次、山田 隆一を担当者として、平成9年9月16日に着手し、平成10年3月31日に終了した。また、遺物整理作業は、資料係を中心に平成10年4月1日に着手し、平成11年3月31日に終了した。
- 4 現地調査にあたっては、大阪府泉州農と緑の総合事務所、堺市教育委員会及び地元関係各位の御協力を得た。記して感謝の意を表します。
- 5 本書の執筆は竹原、山田が行ない、編集は竹原が行なった。また文責は、目次に示すとおりである。

本　文　目　次

はしがき

例　　言

第1章　調査に至る経過と平成9年度の調査（竹原）

　　第1節　調査に至る経過..... 1

　　第2節　平成9年度の調査..... 2

第2章　周辺の環境（竹原）..... 3

第3章　調査の方法（竹原）..... 5

第4章　調査の結果

　　第1節　1区（山田）..... 7

　　第2節　2区（山田）..... 28

　　第3節　3区・4区・5区（竹原）..... 46

第5章　まとめ（山田）..... 54

報告書抄録

第1章 調査に至る経過と平成9年度の調査

第1節 調査に至る経過

堺市陶器北、上之に所在する陶器南遺跡は、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器の生産地であった陶邑窯跡群のすぐ北に隣接し、南東から北西に舌状に伸びる丘陵の先端部に位置する。現状は、ミニ開発による住宅地が散在しているが、丘陵上から谷へ向かう傾斜地に水田がひろがっており、古くからの景観をよく止めている。

大阪府農林水産部（現環境農林水産部）は、この地域において緑住区開発関連土地基盤整備事業「陶器北地区」の実施を計画した。事業地内には、陶器千塚古墳群、陶器南遺跡、上之遺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されていた。大阪府教育委員会では、この取り扱いについて農林水産部と協議した結果、平成3年から計画地内における発掘調査を実施することとなった。

平成3年は、まず計画地域の北側にある陶器千塚古墳群の試掘調査を実施した。この結果、削平された数基の古墳の周濠を検出した。また、古墳時代の集落も確認することができた。

平成4年度は、前年度の試掘調査の結果をうけて計画地内の発掘調査を実施した。この結果、墳丘の一部が残存していた古墳も含め4基の古墳を検出した。調査後の協議で、事業地内に墳丘が残存している古墳1基については、現状のまま保存されることになった。

平成5年度の調査では、主体部が「木芯粘土室」の古墳を調査した。また、平成6年度以降に事業が計画され、遺跡の範囲外であった事業計画地南部の試掘調査を実施した。試掘の結果、遺構・遺物が、調査範囲全域に広がっていることが確認された。

このため、陶器南遺跡の範囲を拡大することとなり、文化財保護法第57条の6の遺跡の発見通知を文化庁長官あてに提出し、次年度以降に陶器南遺跡の発掘調査を実施することとなった。

平成6年の発掘調査では、古墳時代後期の掘立柱建物3棟、溝、土坑等を検出した。また、多量の須恵器が出土したことにより、陶器南遺跡は、須恵器生産に関連した人々の集落であることが確認できた。

平成7年度の発掘調査では、古墳時代後期の集落を調査するとともに、新たに古墳時代の集落の東側に奈良時代、鎌倉時代の集落が存在していたことを確認することができた。また、平成8年度以降に事業が計画され、遺跡の範囲外であった事業計画地南東部の試掘調査を実施した。この結果、この地域からも遺構・遺物を検出した。

このため再度、遺跡の範囲拡大を行うことになった。今回の遺跡の拡大では、大阪府教育委員会と堺市教育委員会で協議し、陶器南遺跡に隣接する陶器東遺跡、上之遺跡が遺跡の時期、性格が同じであることから、これらの遺跡も含め、陶器南遺跡として大きく括ることとなった。

平成8年度の調査では、鎌倉時代の竈を有する掘立柱建物を検出することができた。この建物は2間×6間の庇をもち、居館と考えられている。さらに平安時代の集落の存在を確認し、陶器南遺跡が古墳時代から鎌倉時代までの大複合遺跡であることが明らかとなった。

第2節 平成9年度の調査

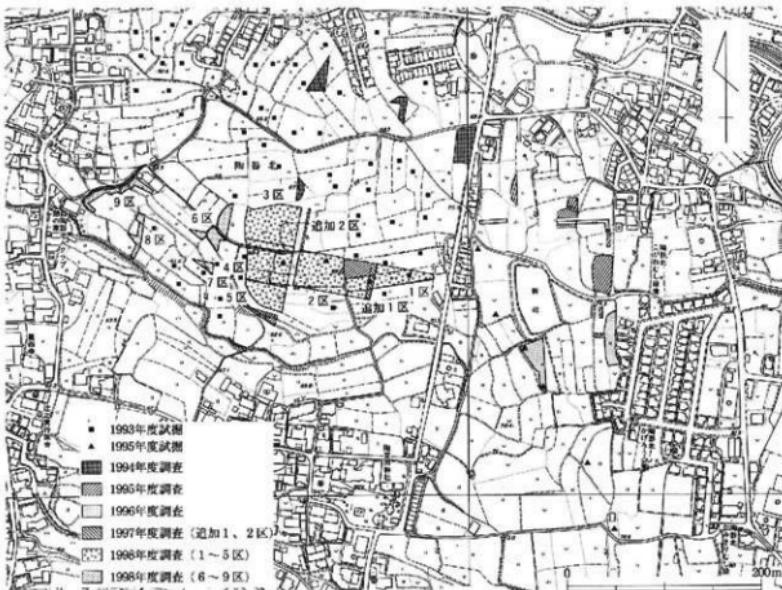
陶器南遺跡にかかわらず、ほ場整備など農林関係の発掘調査は、大阪府農林水産部との協議により、耕地整備や新設の水路、道路などで遺構面が削平される区域のみ実施し、盛土される部分については、遺構面が保存されるので調査は実施しない方針となっている。

平成7年度についても、平成5年度の試掘調査をふまえた基本設計により、削平される部分、約750m²のみの発掘調査を実施した。ところが平成8年度に至り、泉州農と緑の事務所と地元地権者との調整により、この区域が更に地面を下げた設計に変更された。しかしながら、この間の教育委員会との連絡協議が充分ではなく、一部の区域について工事着手される事態となつた。

このため、平成9年度の発掘調査は協議の結果、当初から予定されていた発掘調査と、工事着手部分の発掘調査を実施することになった。まず、工事着手部分については、緊急を要した排水路部分を追加1区、2区として調査した。その後、耕作地となる区域について1区から5区の名称を付して約7,850m²を調査した。そして、当初より平成9年度事業として予定していた区域は、6区から9区として約1,300m²を発掘調査した。

1区から5区では、既に遺構面が削平を被った範囲も広く、3区から5区については遺構の残存状況は良くなかったが、1区、2区については削平が浅く、28棟に及ぶ古墳時代後期、奈良時代の掘立柱建物跡、溝、古墳時代後期の土坑などを検出することができた。

今回報告するのは、平成10年度に遺物整理を実施した追加1区、2区及び1区から5区である。なお、6区から9区については、平成9年度に概要報告書を作成している。



第1図 調査区位置図

第2章 周辺の環境

大阪府南部の堺市、和泉市一帯には、泉州丘陵と呼ばれる丘陵が広がっている。この丘陵は、洪積段丘上面にあたり、丘陵上には幾つもの小河川による開析谷が発達している。陶器南遺跡は、北を陶器川、南を前田川による開析谷にはさまれた丘陵の先端に立地する。

陶器南遺跡の周辺には、陶器千塚古墳群を初めとして多くの遺跡が確認されている。前田川の開析谷の南側には、古墳時代から古代にかけて日本最大の須恵器の生産地であった、陶邑窯跡群が広がっている。現在、陶邑窯跡群では、約1,000基の窯跡が確認されている。また、陶器川、前田川の谷筋にも数カ所の窯跡が確認されている。

古墳時代の陶器南遺跡は、第1章で記したように、調査の結果、須恵器生産に関連した工人たちの集落であると考えられている。本遺跡と同じ須恵器工人の集落と考えられているのに、本遺跡の北にある小角田遺跡と、西にある田園遺跡、辻之遺跡がある。これらの遺跡はいずれも、掘立柱建物とともに大量の焼け歪んだ須恵器が出土し、須恵器の生産、選別や出荷に関連する集落として位置付けられている。

このなかで辻之遺跡が集落としては古く、5世紀後半に成立する。その後、6世紀前半には田園遺跡が、6世紀後半には本遺跡と小角田遺跡が成立する。そして7世紀初頭には辻之遺跡が、7世紀後半には小角田遺跡が須恵器生産の集落としては廃絶し、須恵器の生産が終わる平安時代末頃まで存続するのは、陶器南遺跡と田園遺跡のみである。

陶器千塚古墳群は、昭和25年には1基の前方後円墳と32基の円墳が存在していた。これらの古墳は、その後の開発によって破壊され、現在は数基の古墳が現存しているにすぎない。今回のは場整備に伴う発掘調査の他にも、数カ所の古墳の発掘調査が実施されている。これらの古墳からは須恵器が大量に副葬されていたりその位置関係から、陶器千塚古墳群は、陶器南遺跡などの須恵器工人集落の墓域として考えられている。

また、本遺跡の南にある延喜式内社「陶荒田神社」からは、平安時代の瓦が出土している。この神社も須恵器工人との関連が考えられている。

鎌倉時代になると、平安時代から引き続いて陶器南遺跡、田園遺跡が集落として存続し、辻之遺跡、小角田遺跡でも再び集落が成立する。特に陶器南遺跡では、1995年及び1996年の調査で12世紀末から13世紀初頭の2間×5間、2間×6間の掘立柱建物を近接して検出している。これらの建物は居館としての性格が考えられ、陶器南遺跡がこの地域における拠点集落であったことが考えられる。

陶器南遺跡、辻之遺跡、田園遺跡、小角田遺跡では、この後15世紀まで集落が存続する。陶器南遺跡の北にある陶器城跡（北村砦跡）は、鎌倉から室町時代の城跡とも江戸初期の陶器藩の屋敷地と考えられている。陶器城跡が鎌倉から室町時代の城跡とすると、これらの遺跡と深い関連をもつものであると考えられる。



第2図 調査地周辺の遺跡分布図

第3章 調査の方法

1. 地区割

大阪府教育委員会では、発掘調査を実施する際、府域全体を統一した物差しで測れるように独自の共通した地区割を設定している（第3図）。

地区割の基準線は国土座標軸（第VI座標系）を使用し、大から小へ計6段階にわたる区画である。

第I区画

大阪府が独自に設定している、1万分の1地形図の地区割図をそのまま使用している。1区画が1万分の1の地形図1枚の範囲となる。区画の最南端を基点とし、縦軸AからO、横軸0から8で表示する。縦6km、横8kmになる。

第II区画

2500分の1地形図の地区割図をそのまま使用している。第I区画を縦、横各4分割し、計16の区画となる。1区画は、2500分の1地形図1枚の範囲であり、表示方法は、南西端を1とし東へ進み、北東端を16とする平行式の区画である。縦1.5km、横2.0kmの範囲になる。

第III区画

第II区画内を100m単位で区画する。縦15、横20の区画になる。表示方法は、北東端を基準に縦をAからOに、横を1から20と表示する。

第IV区画

第III区画内を10m単位で区画する。縦、横各10区画になる。表示方法は、北東端を基点とし、縦をaからj、横を1から10で表示する。

この他、第IV区画を5m単位に区画する第V区画、第IV区画を北東端を基点としてmm単位まで細分できる第VI区画がある。

この区画の表示方法は、第I区画から順に記載していくが、今回の陶器窯遺跡の調査では、第I区画がE5、第II区画が7になる。第III区画はB19、C16、C17、C18、C19、D17、D18となる。

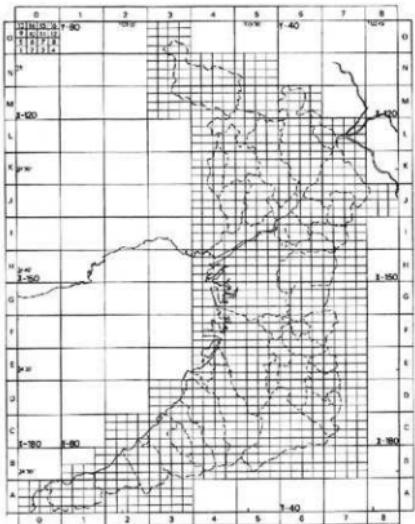
V区画については、第III区画と共に本文及び図中に示すとおりである。

2. 土色

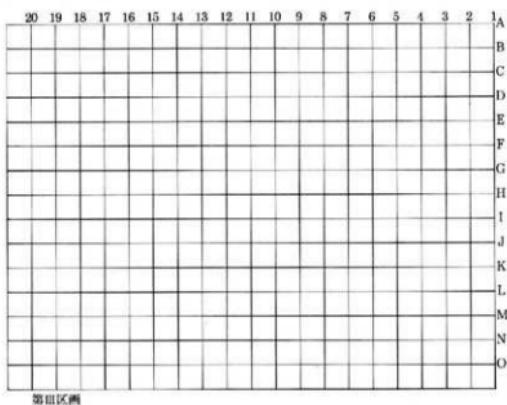
本文、挿図に用いた土色は、『新版 標準土色帖 12版』（小山正忠・竹原秀雄編・著）に基づいている。

3. 遺構番号

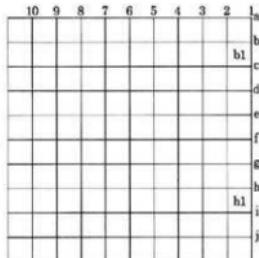
今回の調査では、各調査区において数多くの遺構を検出した。このため、遺構の種類ごとに番号をふることはせず、検出した順番に遺構に通し番号を付けている。その後の整理の段階で、遺構の種類をそのまま遺構番号の前に付けた。



第Ⅰ区画・第Ⅱ区画



第Ⅲ区画



第Ⅳ区画

第3図 地区割図

第4章 調査の結果

第1節 1区

前述したように、は場整備事業の重機掘削で破損、あるいは消滅した程度が調査区の中でも異なっており、ここに報告した遺構が本来の密度を示すわけではない。破損の深度からすれば、本調査区南半の状況が本来の遺構密度を示している、と考えられる。ちなみに、調査区北西部分の遺構密度が薄いのは、一段高い田圃であったために、工事事前着工の削平が数10cmと著しいことによるものであり、他は一枚の田圃で遺物包含層すべてと遺構面がいくぶん削平を被った状況で残存したものである。

現地は、南南西方向に緩やかに落ちる斜面地である。遺構としては、掘立柱建物12棟の他、木来建物を構成したであろう多数の柱穴、杭痕、溝、土坑、落込み、および中世の鋤溝を確認した。遺構は地山面で検出できるが、中世鋤溝のみは明らかに他の古墳時代後期、奈良時代に属する遺構より上面から掘り込まれている。層が厚く残る西南隅の遺構は、鋤溝面を削平した後に確認できたものである。なお、掘立柱建物は古墳時代後期から奈良時代のものであり、その時期の位置付けは極めて不明確である。

掘立柱建物101 梁行2間（約6.3m）、桁行2間以上の縦柱建物で、北東西三面に庇を確認している。四面庇になる可能性が高い。調査区境に設置したトレンチによって、身舎の西側柱1が、さらに南にのびることを確認している。軸線方位は、N 7°30' W程度。本建物は軸線方位がほぼ正南北で、柱穴掘り方が方形の大型建物である。断面観察による柱径は、身舎柱が18cm前後、庇柱が13~14cmである。溝71・281によって方形に区画された内部にあったと考えられる。方形区画の幅は、東西23.3~23.6m。掘立柱建物111と重複するが、先後関係は不明。なお、本建物は古墳時代後期の土坑860と全く重複しており、柱穴内に多量の該期の遺物が混入し、またそれに気付くのに遅れる不手際もあって遺物の取り上げに混乱が生じた。

遺物（第4図1~3） 盖（1）、杯（2・3）がある。柱穴出土遺物から古墳時代後期を除外したもので、いずれも奈良時代のもので、建物の時期を示す。

掘立柱建物102 梁行2間（4.2m）、桁行4間以上（8.1m以上）の側柱建物。軸線方位は、N 2°W。本建物は軸線方位がほぼ正南北で、柱穴掘り方が方形の大型建物である。掘り方は50~65cm四方、柱径20cm前後である。ただし、北列の中央柱掘り方は円形で断面観察による柱径は14cmで、側柱に重量を持たせる構造である。なお、東列の北から2本目の柱は他より細い。また側柱2列目の中間に柱穴があり、伴う可能性もある。西側柱掘り方が、掘立柱建物103の南中間柱の掘り方を切っており、それより新しい。

遺物（第7図25~27） 杯身（25・26）、杯（27）があり、これらは東列南端の柱穴、およびそれを覆う落込みからの出土である。問題となる杯27は、生焼けで摩滅も著しい。底部外面は平

坦化しており、ナデ仕上げ。内面はロクロ成形時の凹凸が残り、これを古い要素ととらえ 7世紀代と考える。この時期には建物は廃絶していた可能性がある。

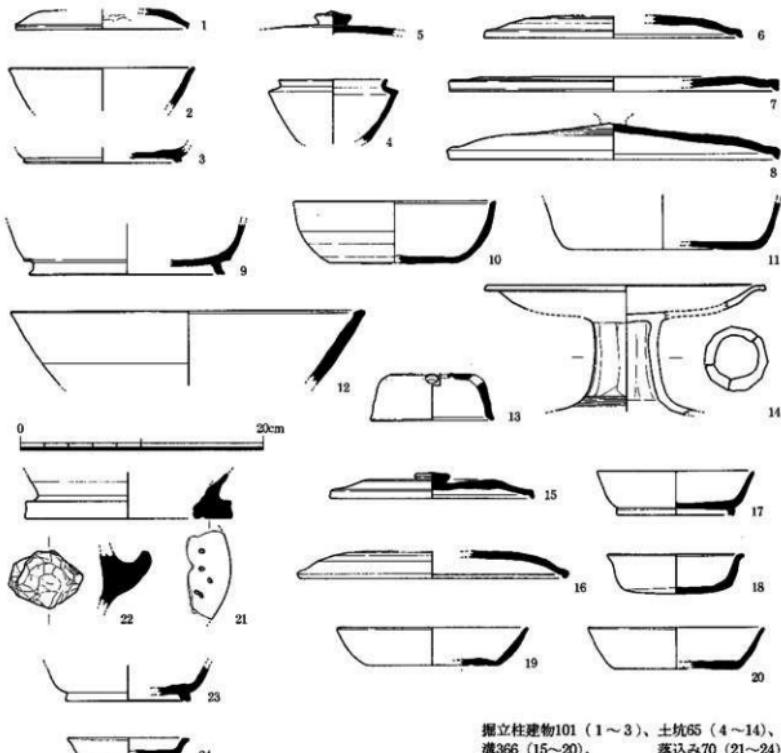
掘立柱建物103 梁行2間(3.5m)、桁行4間(7.9m)の側柱建物。軸線方位は、N21°E。柱穴掘り方が隅丸方形と円形のものがある。なお、南西隅の柱は写真撮影時には奈良時代の方形壕溝を構成する溝281と重複し未確認であったが後に検出し、また西側中間の柱掘り方もそれに切られている。重複する溝281、および前述した掘立柱建物102より古い。

遺物(第7図28~30) 杯身(28・29)、高杯(30)があり、いずれも南東隅の柱穴より出土したものである。古墳時代後期に属する。

掘立柱建物104 梁行2間(3.0m)、桁行3間(4.8m)の側柱建物。軸線方位は、N7°30'W。

北側中間柱は未確認である。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物105と重複するが、先後関係は不明。

掘立柱建物105 梁行2間(3.2m)、桁行2間以上の側柱建物。南半は調査区外。軸線方位は、



第4図 1区 掘立柱建物101、土坑65、溝366、落込み70出土遺物



第5図 1区 平面図



第6図 1区の掘立柱建物
— 11~12 —

N 0°30' E。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物104と重複するが、先後関係は不明。

掘立柱建物106 2間四方 (4.2×4.2m) の建物。身舎内中央のピットは確認できない。軸線方位は、N 7°30' E。柱穴掘り方は円形。南側中間柱掘り方が、掘立柱建物108の掘り方に切られており、それより古い。

掘立柱建物107 梁行2間 (3.8m)、桁行3間 (5.6m) の側柱建物。軸線方位は、N 2° E。規模に比して、柱掘り方が45~70cmのやや大型の隅丸方形を呈する。なお水路設置に伴う事前調査において北側中間柱を確認しており、直径20cmの円形掘り方である。落込み40の上面で柱穴を検出しており、それより新しい。

遺物（第7図31） 器台であり、北西隅の柱穴からの出土である。口縁端部を横方向に引出しており、体部には刺突文を巡らせる。後述する落込み40、土坑100に口縁端部形態の類似するものがあり、古墳時代後期に属する。

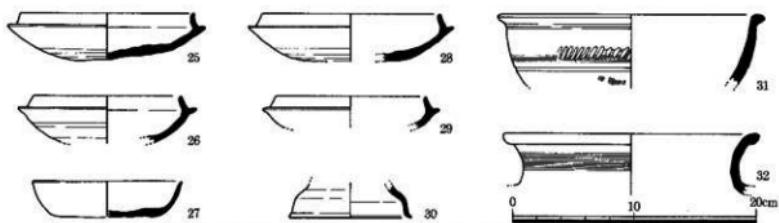
掘立柱建物108 梁行2間 (3.6m)、桁行3間 (6.6m) の側柱建物。軸線方位は、N 3°30' W。柱穴掘り方は円形。北西隅柱穴が掘立柱建物112、東側柱が掘立柱建物106の柱掘り方を切っており、二者よりも新しい。また、西側南端の柱穴が奈良時代の溝366に切られており、それより古い。なお東側柱列、北側柱列において、ピットの重複が著しく数回の建替え、あるいは重複が想定できるが明らかにしない。

掘立柱建物109 2間四方 (2.6×2.6m) の極めて小型の総柱建物と考えられるが、中間南北列は調査区画のため不明。建物の東側柱列は、水路設置に伴う事前調査で確認している。軸線方位は、N 4° E。柱穴掘り方は円形。落込み40と重複するが、先後の確認を怠った。

掘立柱建物110 1間四方 (2.85×2.8m) の側柱建物と考えられる。軸線方位は、N 20° E。柱穴掘り方は円形。削平の著しい部分であり、本来の形態、規模でない可能性も高い。

掘立柱建物111 梁行2間 (4.02m)、桁行3間 (6.2m) の側柱建物。軸線方位は、N 8°30' W。柱穴掘り方は円形。北半で柱穴3が奈良時代の土坑65と重複しており、いずれも土坑埋土を除去した後に検出しており、それより古い。また南東部で古墳時代の土坑860を切っており、それより新しい。掘立柱建物101と重複するが、先後関係は不明。

掘立柱建物112 梁行2間 (4.0m)、桁行3間 (6.0m) の側柱建物と考えられる。軸線方位は、



掘立柱建物102 (25~27)、同 103 (28~30)、同 107 (31)、同 109 (32)

第7図 1区 掘立柱建物102・103・107・109出土遺物

N27°E。柱穴掘り方は円形。両柱側の中間部に柱穴が位置するが、伴うものか判らない。いずれも柱は太く、西のものには円礫で固定している。東側柱2本目の柱穴掘り方が、掘立柱建物108の北西隅柱穴に切られ、それより古い。

溝2 規模は幅1.2~0.6m、深さ18~10cm程度。方位は、N13°Wであるが、側縁は凹凸が目立つ。断面は浅い「U」字形を呈する。埋土は2層に分層できるが、いずれにも地山起源の明黄褐色(10YR 6/8)粘土ブロックが入る人為の埋め立てである。底面に密着した状況で多量の遺物が出土している。

遺物(第9図33~54、第10図55~61) 杯蓋(33~40)、杯身(41~52)、有蓋高杯(53)、瓶(55・56)、甕(57・58)、円筒(59~61)がある。

杯蓋は、体部と口縁部の間に稜線を残すものは無い。回転ヘラケズリの範囲は1/2~1/3で、不調整の個体は皆無。口縁端部は、丸く終わらせるものが多いが、33のみは段を有し、しかも稜線の痕跡を残し、口径も大きく、古い形態を残す。法量は口径13.0~14.8cm、器高4.2~4.6cmが主体的。ヘラ記号を刻するものが多い。

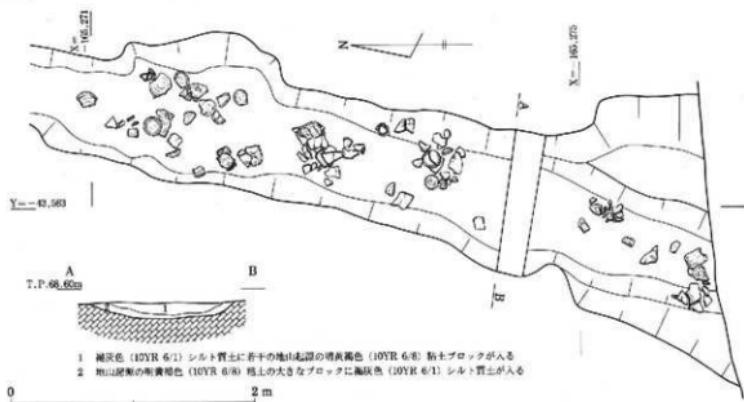
杯身の立上りは、直線的に内傾させる。端部は丸く終わらせるか尖らせる。やはり回転ヘラケズリの範囲は1/2~1/3で、不調整の個体は皆無。外面底部にヘラ記号を刻するものが多い。口径12.2~13.3cmが主体的である。なお、48の内面底には同心円文當て具痕が残るが、本遺跡では他にあまり例がない。

有蓋高杯はスカシのない短脚が付く。

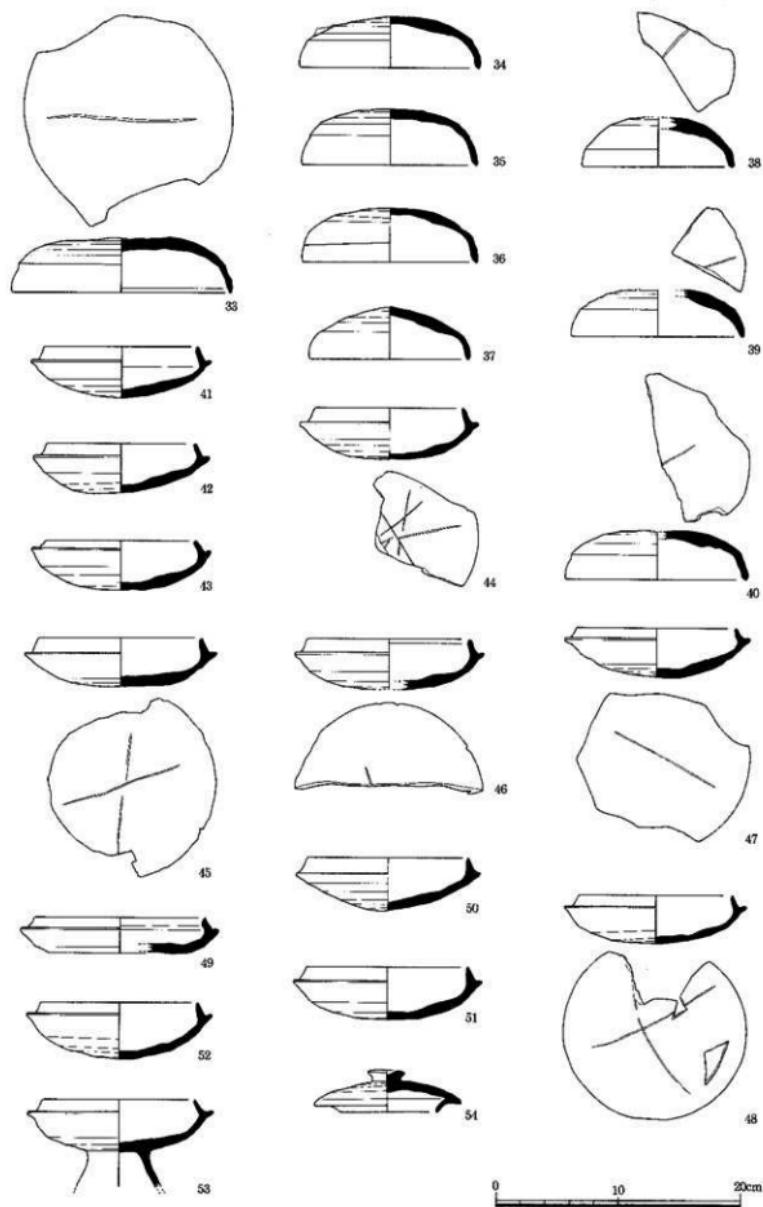
瓶(55・56)は体部上半はカキ目、下半は工具ナデ。いずれも焼成は甘く、軟質である。

甕は無文で、肩部にカキ目を施す。口縁端部を横に引出し丸くしている。

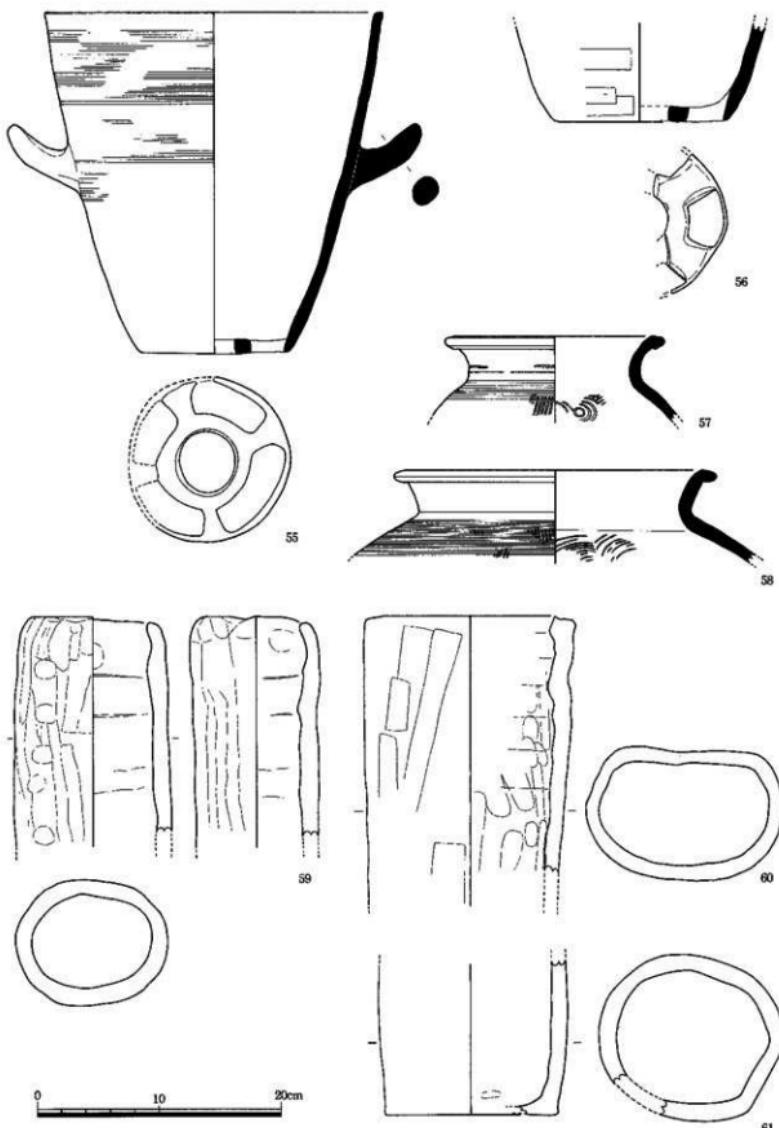
円筒は用途不明の円筒形品。いずれも焼成はあまり軟質である。59は断面が楕円形で、口縁部は内湾させるが凹凸がある。60も断面が楕円形ながら、体部に面を有しカマボコ形に近い。口縁



第8図 1区 溝2 遺物出土状況 (1/40)



第9図 1区 满2出土遺物 (1)



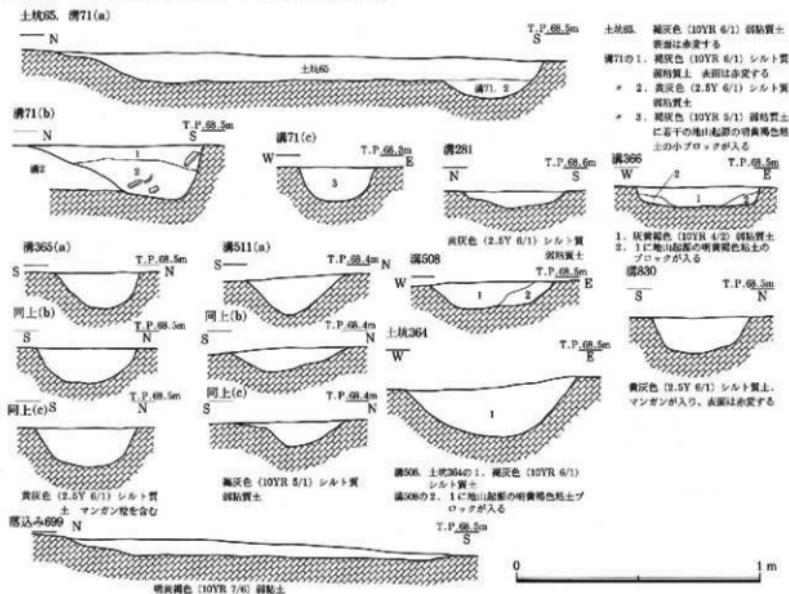
第10図 1区 溝2出土遺物（2）

部に平坦面を作り、59より重厚である。両者とも外面に縦方向の粗い工具ナデ、内面に成形時の接合痕と指頭圧痕が残る。61は断面円形。薄く平坦な底部であったと考えられる。摩滅のため、調整不明。

溝71 挖立柱建物101の周囲を巡る溝で、北半のみを「コ」字状に検出した。北面は幅90cm程度、東面は幅70cmと狭くなっている。また西面は狭く浅くなり、途切れていることから入口部分と想定できる。方位は、最も良好に残る東面でN 5°30' Wを示す。北面溝の断面形は建物側が急角度、北側がゆるやかに傾斜する「V」字状である。埋土は表面が赤変するシルト質弱い粘質土で2層に分層できる。溝2と土坑860を切っており、土坑65に切られる。

溝281 直角に屈曲する「L」字状の溝で、両端は途切れる。幅30~40cm、深さ5~7cmと浅く、断面形も緩やかな皿状を呈する。方位は南北溝でN 9°30' Wを示す。埋土はシルト質弱粘質土の1層である。掘立柱建物101周囲を巡る溝71と南北方向が平行し、東西方向が一直線上にのることから、一連の遺構と考えられる。なお、掘立柱建物103を構成する柱穴2を切っており、中世鉄溝に切られることも、一連の遺構と考えることに矛盾しない。

溝365 規模は幅35~40cm、深さ13~16cm程度で、断面「U」字形にきっちりと掘り込まれている。ほぼ直線的に延びており、33m分を確認した。埋土はマンガンを含む黄褐色(2.5Y 6/1)シルト質土の1層。部分的に浮いた状況で遺物が出土している。掘立柱建物102、および奈良時代の溝366に切られており、いずれよりも古い。



第11図 1区 溝、土坑等断面図（断面位置は第5図）

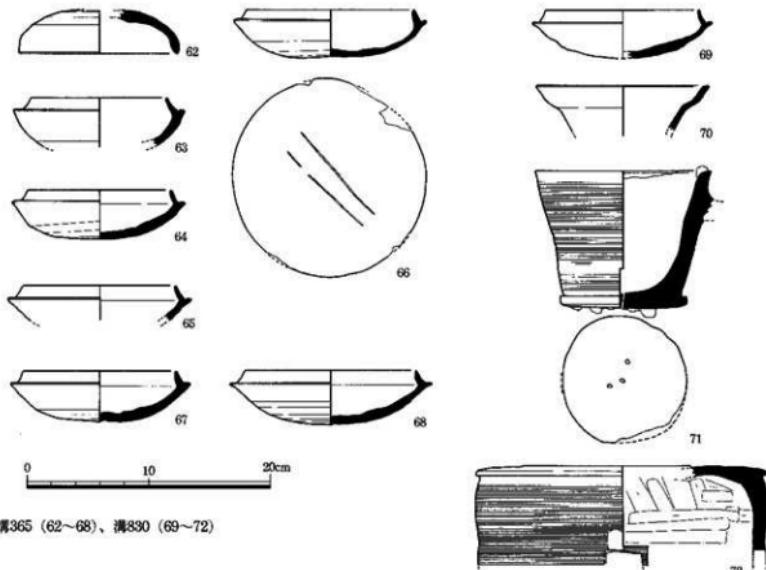
遺物（第12図62～68）　杯蓋（62）、杯身（63～68）がある。杯蓋は体部と口縁部の間に稜線を残さず、口縁端部は丸く終わらせる。杯身の立上りは、直線的に内傾させる。端部は丸く終わらせるか尖らせる。ヘラケズリ不調整の個体は無し。口縁端部形態のバラエティーに反して、たちあがり高はすべて1cm前後である。

溝366 規模は長さ3m、幅40cm、深さ7cm程度で、直線的に延びる溝。方位は、掘立柱建物108、およびその周辺のピット列方位とはほぼ一致している。埋土はマンガンを含む黄灰色（2.5Y 6/1）シルト質土の1層。遺物は遺構中央部に集中し、底から若干浮いて出土している。中世鋤溝に切られ、溝365と掘立柱建物108の西南隅柱穴を切る。

遺物（第4図15～20）　蓋（15・16）、杯（17～20）があり、奈良時代に属する。杯には、高台を有するもの（17）、高台がなく口縁端部を横に引出す小型品（18）、体部が直線的に外傾するもの（19・20）の三者がある。杯19・20の底部外面は粘土紐痕の残る雑なナデ仕上げ。

溝511 規模は幅20～55cm、深さ10～15cm程度で、断面は若干「V」字形に掘り込まれている。ほぼ直線的に延び、28mを確認している。埋土は褐灰色（10YR 5/1）シルト質弱粘質土の1層。なお、溝北側に沿って多数のピットが確認でき、杭を打込んだ施設を伴なう。西方は溝71と交わってから検出できないが、溝365とほぼ平行する関係にある。

溝830 規模は幅36～46cm（本来の幅は42cm程度か）、深さ10～15cmの湾曲する溝で、きっちりと掘り込まれる。埋土はマンガンを含む黄褐色（2.5Y 6/1）シルト質土の1層で、表面は酸化赤



溝365（62～68）、溝830（69～72）

第12図 1区 溝365・830出土遺物

変する。部分的に集中して遺物が出土している。復元していないが、方形掘り方の建物に切られる。

遺物（第12図69～72） 杯身（69）、甌（70）、把手付き鉢（71）、不明品（72）がある。杯身69、甌70は、後述する土坑100等と同じく、TK43～209の中で理解できるものである。把手付き鉢71は、外側カキ目、底に細い孔が貫通している。底部外側には窯壁片が多数付着する。不明品72の焼成はあまく、軟質。長方形のスカシを有するもので、外側はカキ目、内側は工具ナデ仕上げ。上面は同心円状に削っており、剝離なのかの駆別は困難。それにしても円面硯や壺の脚台ではない。周縁は粗くカキ取っただけで、粘土がはみ出したままで残る。二次焼成もないから焼き台でもなく、何なのかわからない。

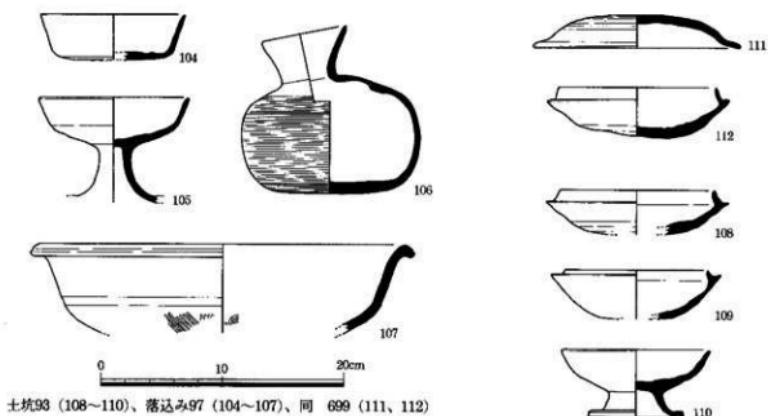
溝508・土坑364 若干湾曲して延びる溝と、その先端に取り付く土坑である。一連の遺構と考えられるが、用途は不明。溝の規模は長さ4.7m以上、幅55～65cm、深さ15cm程度。土坑の規模は、0.95×0.7mの楕円形、深さは20cm。いずれも、断面「U」字形を呈し、埋土は褐灰色（10YR 6/1）小礫混じりシルト質粘土の1層。

土坑65 矩形を呈する土坑で、深さ10cm前後で底部は平坦である。埋土は褐灰色（10YR 1/6）弱粘質土の1層で表面は赤変する。南側は直線的で溝71のラインと合致しており、掘立柱建物101とも関連が想定できる。なお、本土坑は溝71と掘立柱建物111、104を切っており、いずれよりも新しい。数点の遺物が出土したが、多くが奈良時代のもので、混入がほとんどない。

遺物（第4図4～14） 壺（4）、蓋（5～8）、杯（9）、鉢（10～11）、平鉢（12）、焼き台（13）、土師器高杯（14）がある。

壺4は器壁が薄く、丁寧なヨコナデ仕上げであり、外側下端にヘラケズリが残る。

鉢10は、口縁端部に内傾する平坦面を有し、作りが丁寧で、金属器を模したと考えられる。体



第13図 1区 土坑93、落込み97・699出土遺物

部外面は幅の狭い回転ヘラケズリの後、極めて丁寧な横方向の細かなヘラミガキを施す。内面と底部外面は丁寧なナデ仕上げ。

鉢11の底部外面は、ナデ仕上げであるが、粘土紐痕が明瞭に残る。

焼き台13は、混入の可能性もある。

土師器高杯14は、杯部は摩滅が著しく調整不明。脚部は裾部に工具ヨコナデの後、ヘラケズリを施し11面を形成している。内面はナデ仕上げるが、シボリ痕が残る。淡赤褐色。

土坑93 隅丸方形の土坑であるが、規模は不明。深さ15cm程度、底は平坦。

遺物（第13図108～110） 杯身（108・109）、無蓋高杯（110）がある。

杯109は4mm程度の低く尖った立上りを有し、底部は平坦。生焼けで剥離著しく、ヘラケズリの有無は不明。口径11.75cmと小型であり、無蓋高杯110と共に後述する土坑100よりも後出のもので、TK209程度。

土坑860 挖立柱建物101にはば重複して検出した巨大な不定形土坑である。東西幅10m程度、深さ0.3m程度。当初、掘立柱建物築造に伴う整地と想定したが、断面は自然堆積を示し、底部では完形に近い古墳時代後期の須恵器が出土した。埋土が黒色であったため、一部掘立柱建物101の柱穴の認定が難しく、また数度の降雨で表面がヘドロ化したために、建物関連の遺物との分離に失敗した。

遺物（第14図73～102、第15図103） 杯蓋（73～77）、杯身（78～85）、高杯（86・87）、甕（88・89）、壺（90～93）、甕（94～99）、および蓋（100）、杯（101・102）、円面覗獸脚（103）がある。

杯蓋は、体部と口縁部間に稜線の痕跡を残すもの（73・74）と、残さないもの（75～77）がある。ただし口縁端部は、すべて丸く終わらせており、段あるいは面の痕跡も残さない。ヘラケズリ不調整の個体はなし。

杯身は立上りは若干外反させつつ、あるいは直線的に内傾させる。端部は丸く終わらせるか尖らせる。回転ヘラケズリ不調整の個体はなし。

有蓋高杯の蓋には、口縁と体部間が屈曲しており稜線の痕跡を残し、口縁端部内面にも内傾する面を形成している。

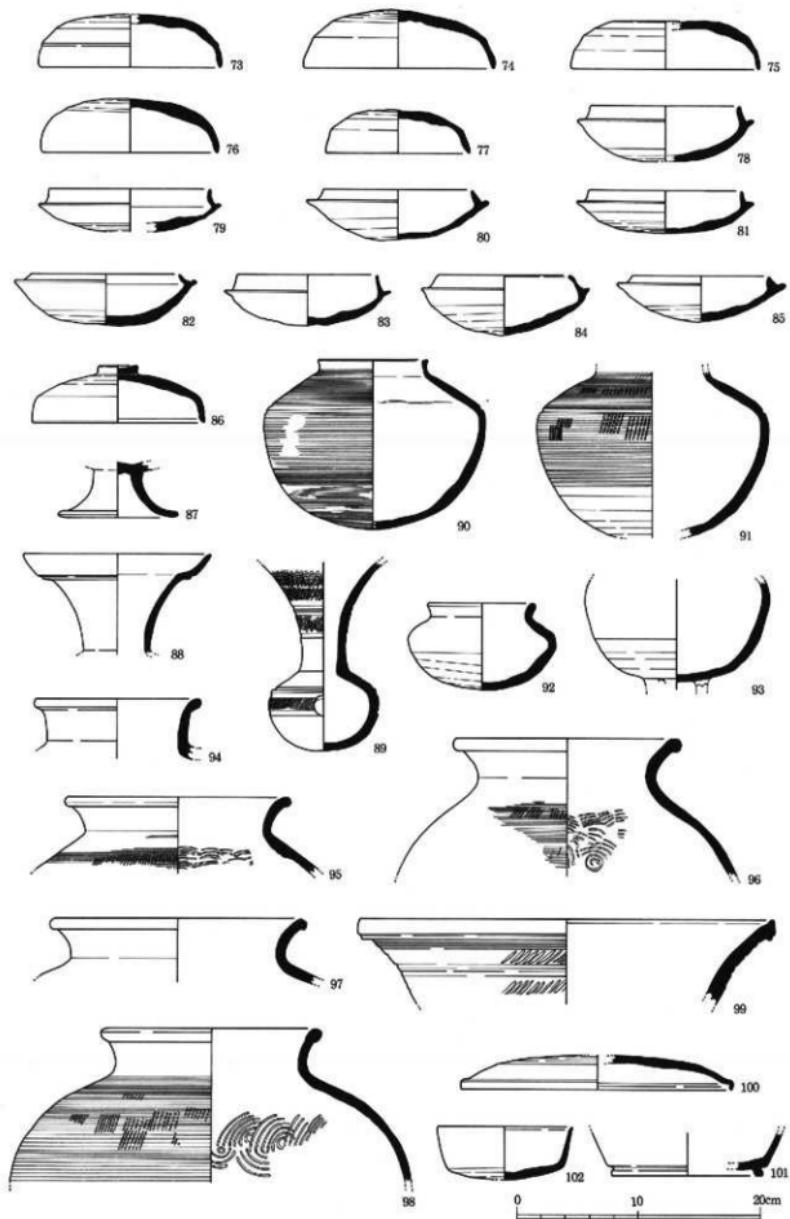
甕は無文のもの（88）と、加飾するもの（89）がある。88の口縁端部は尖らせて終わる。

壺には短頸壺（90・91）、小型短頸壺（92）、台付き壺（93）がある。短頸壺は外面カキ目仕上げで、91の下半にはヘラケズリが残る。内面はナデ仕上げ。

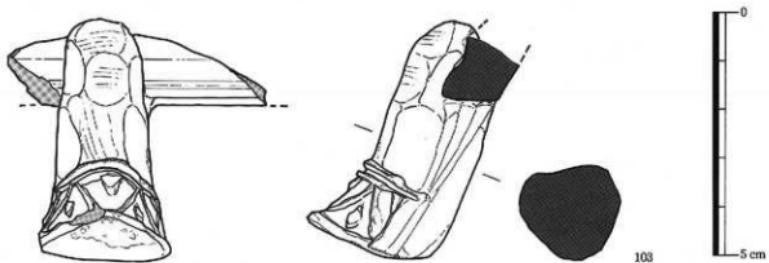
甕には、中小型品（94～98）と大型品（99）がある。前者は口縁端部を丸く肥厚させる。後者は凹線と刺突文で加飾する。

杯102の外面底部は若干丸味をもたせた回転ヘラケズリである。壺蓋の可能性もある。

円面覗獸脚113は、獸脚を模している。獸脚は「型」を使用し、別造りにしたもの貼りつける。獸脚の正面は指頭整形のちナデ、側面後方はタテ方向ヘラミガキ、背面はタテ方向ナデ。文様部は簡単に整えるのみ。脚裏面の先端部分が摩滅している。体部表面は回転ナデ、裾下面是



第14図 1区 土坑860出土遺物(1)



第15図 1区 土坑860出土遺物（2）

ヘラミガキ、内面はヨコナデ。胎土緻密、焼成良好、色調は表面が灰色（N 4/）、破面が赤灰色（5R 5/1）である。細片のため正確な法量は不明ながら、硯裾でやや強引に復元すれば、直径25～26cm程度になる。

落込み40 樹枝状の極めて不定形の落込みとして検出した。北東から南西方向の地形に平行して延びるが、後者は削平により消滅している。底部は凹凸が著しく、深い部分でも15cm前後で、20cmはない浅い遺構である。にもかかわらず、底部地山面および凹部に密着した状況で完形、あるいはそれに近い遺物が多量に出土する。埋土は2層で上層が橙色（7.5YR 7/6）シルト質弱粘質土、下層が明褐色（7.5YR 7/2）シルト質弱粘質土。柱穴には埋土上面からのものと、埋土除去後に確認できるものがある。

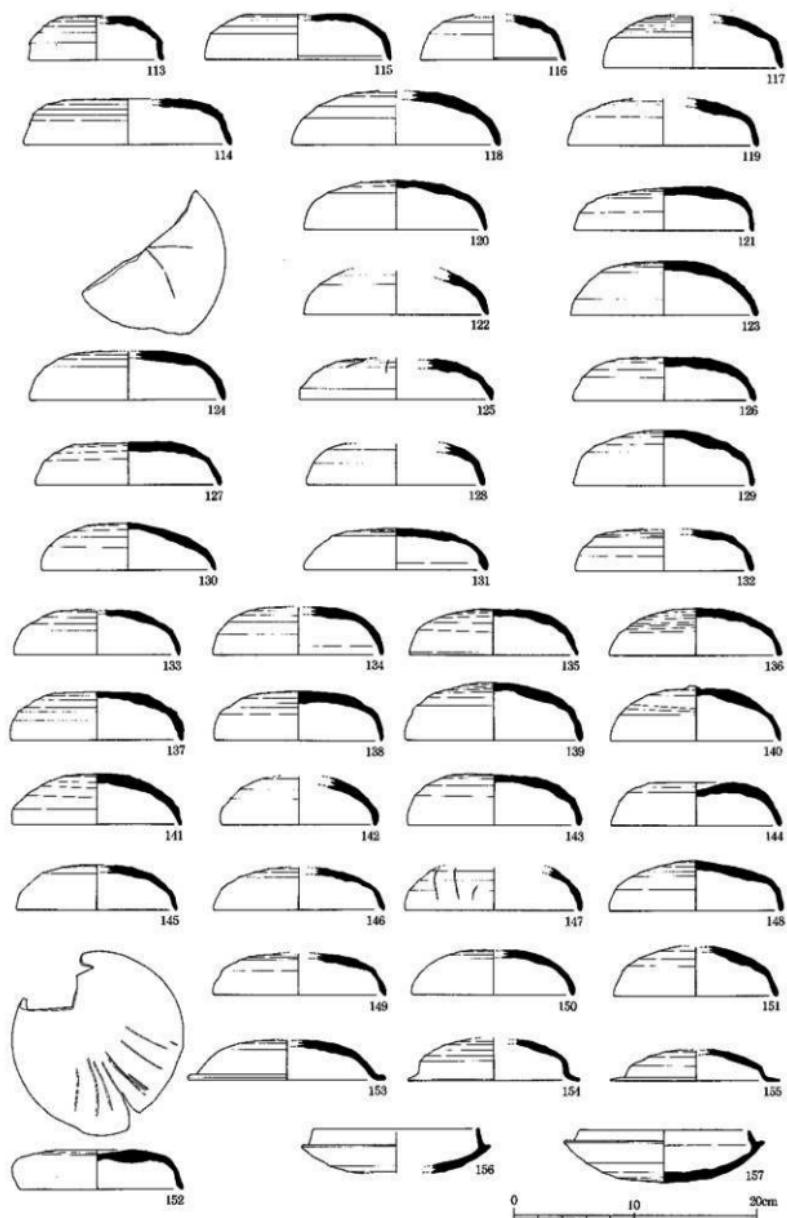
遺物（第16図113～157、第17図158～195、第18図196～218、第19図219～235） 杯蓋（113～155）、杯身（156～195）、有蓋高杯（198～206）、無蓋高杯（207～209）、器台（213～217）、瓶（218）、甕（219）、壺（220～224）、鉢（226・227）、甕（228～235）がある。

杯蓋は若干のバラエティーがある。体部と口縁部の間に稜線を残さず、口縁端部を丸く終わらせるか尖らせるものが主体ながら、一部に稜線の痕跡としての屈曲や凹線を残すもの（113～117・119）がある。後者は古い特徴を残すもので、口縁端部に面を有するもの（113・115・116）がある。回転ヘラケズリ不調整の個体は皆無。法量は口径12.7～15.9cmとばらつく。153～155は口縁部を水平方向に引出す形態である。蓋か身かの識別は難しく、今回は蓋としている。

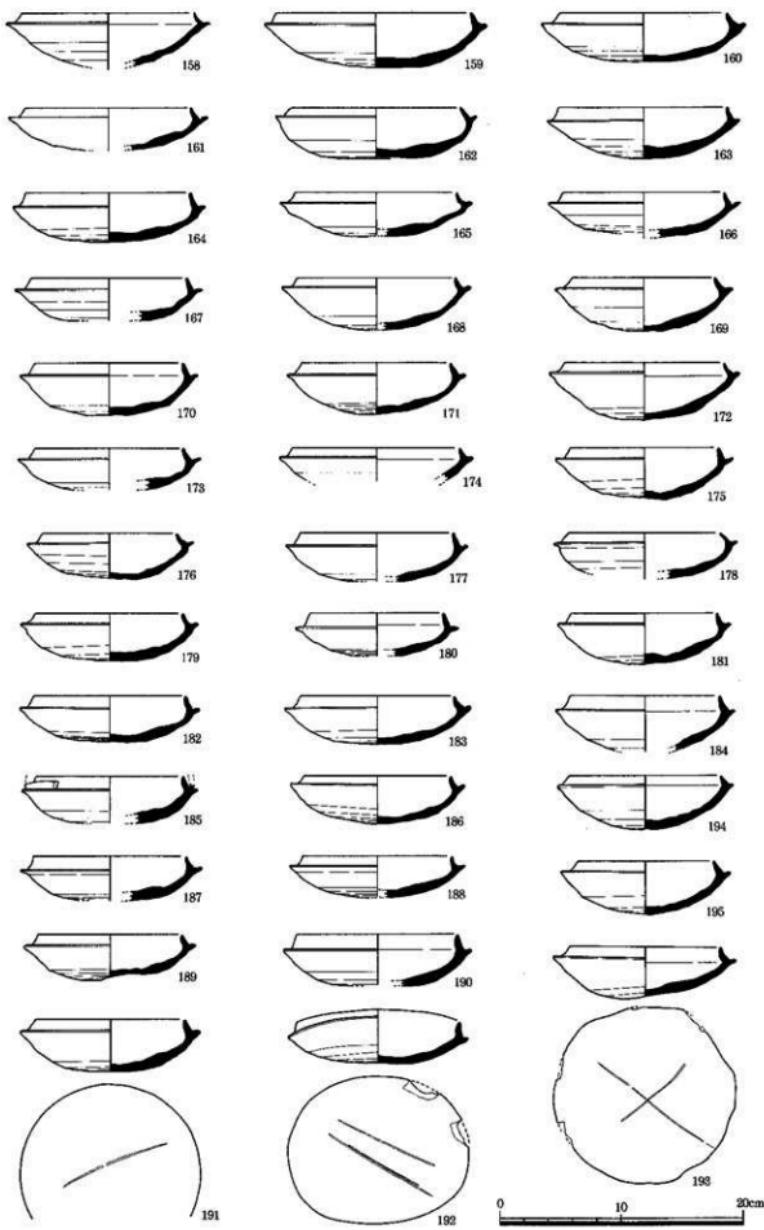
杯身は立上りは若干外反させつつ、あるいは直線的に内傾させる。端部は尖らせるものが主体ながら、丸く終わらせるものもある。やはり回転ヘラケズリの範囲は1/2～1/3で、不調整の個体は皆無。外面底部にヘラ記号を刻するものが多い。

有蓋高杯の蓋には、口縁と体部間に稜線の痕跡を残すもの（199）があるが、口縁端部は丸く終わらせる。体部は杯身と同じ形態に短脚を付ける。なお203の内面底には同心円文当て具痕が残り、それをナデ仕上げする。

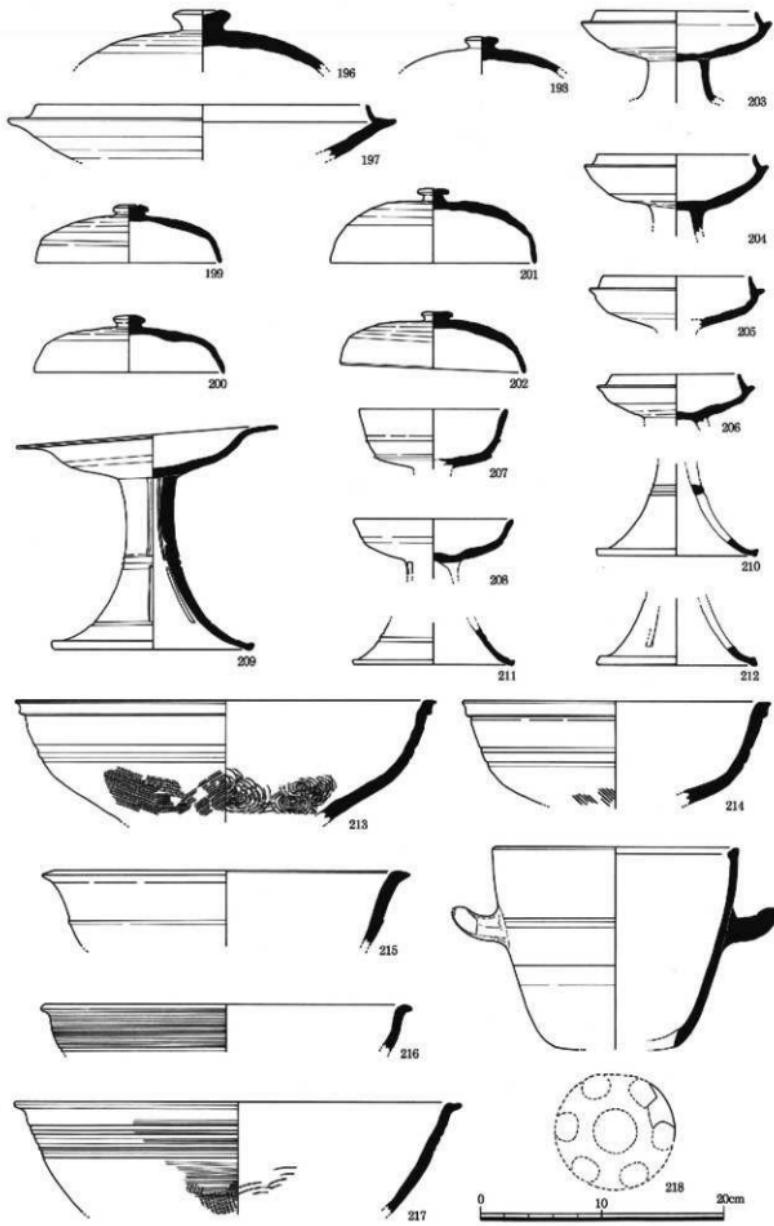
無蓋高杯は、207が長脚二段、208が短脚と考えられる。前者は突帯のみで無文化する。209は



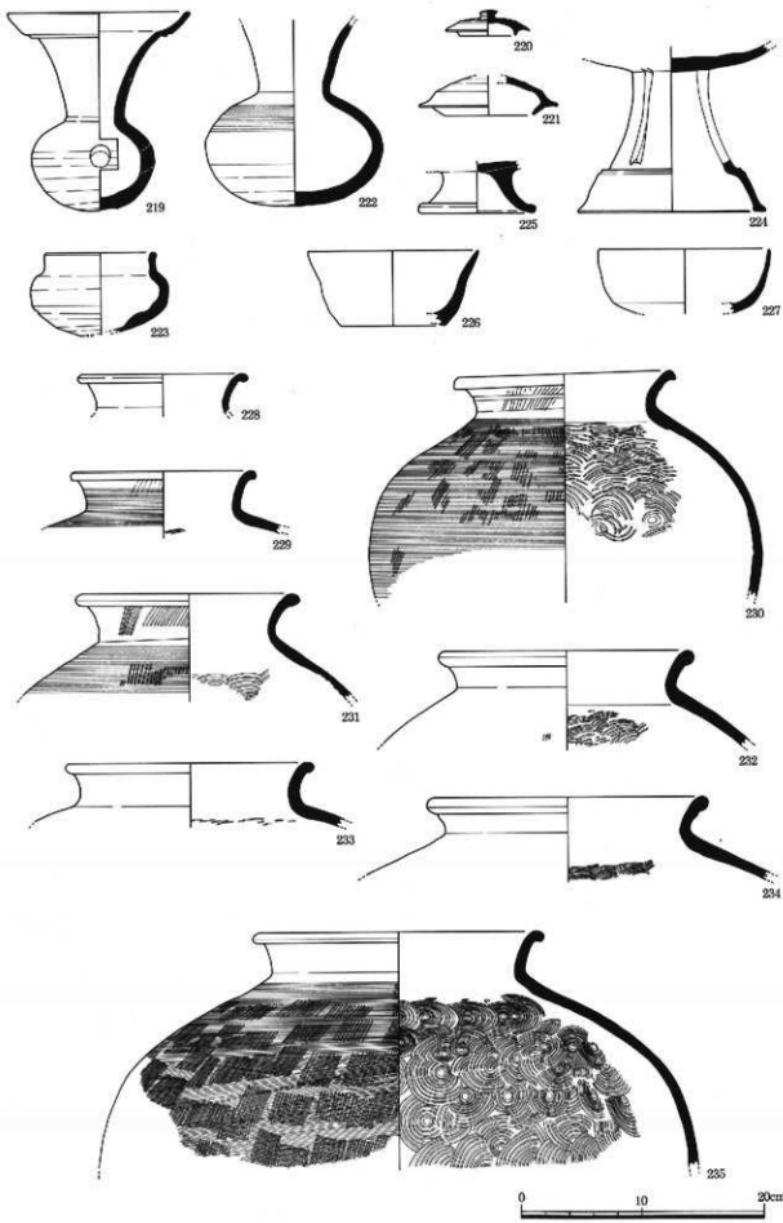
第16図 1区 落ち込み40出土遺物 (1)



第17図 1区 落ち込み40出土遺物(2)



第18図 1区 落ち込み40出土遺物（3）



第19図 1区 落ち込み40出土遺物 (4)

本遺跡では僅かながら出土する水平方向に大きく引出す杯を身として、それに三方スカシの長脚二段を接合した特異なもの。

器台は、口縁端部外面に粘土を付加して突帯を巡らせるもの（213・214）と、端部を水平に引出して尖らせるか丸く終わらせるもの（215～217）がある。文様は、凹線（213・214・217）、カキ目（216・217）が見られるのみで、無文化が著しい。

瓶（218）は焼成はあまく、軟質である。摩滅著しい。体部に2条の凹線を巡らせる。

甌（219）は体部は球形となり、全く無文化している。口縁端部は丸く終わらせる。

壺はバラエティーに富む。壺蓋（220・221）、長頸壺（222）、短頸壺（223）、台付き壺（224）がある。

小型鉢226の底はヘラケズリで仕上げる。

壺は口径13～23cmで、小型品である。文様は施さず、口縁端部を若干引出すもの（230）と、丸く肥厚させるもの（228・229・231～235）がある。

落込み70 土坑65の西に接して検出した浅く、不定形な落込みである。土器細片が多く、一時期の極所的な整地と想定できる。

遺物（第4図21～24） すり鉢（21）、把手（22）、杯（23）、皿（24）がある。

すり鉢の底面は丁寧なナデ仕上げで、後に刺突する。把手は須恵器で、てづくねで仕上げる。

落込み97 不定形な落込みで、南西部分は地形が低くなりラインは確認できない。埋土は2層で、上層は明黄褐色（10YR 6/8）粘質土、下層は地山起源の明黄褐色粘土ブロックを含む灰白色（10YR 7/1）シルト質粘質土。遺物はすべて下層に入る。

遺物（第13図104～107） 杯（104）、高杯（105）、平瓶（106）、器台（107）がある。

平瓶は椭円球の体部に、直線的に外傾する口縁を有する。体部に稜線を有うさないことが、古い要素とすれば、7世紀前半と考えたい。

落込み699 地形に平行して7mを検出した。地形の高い北側ではやや急な傾斜を有し、低くなる南側でのラインはあいまいなことから、高まりの周囲に形成された落込み、と判断した。埋土は明黄褐色（10YR 7/6）弱粘土の1層。遺物は多量に入っているが、ほとんどが細片である。またまんべんなく出土するのではなく、集中部分があることから、廃棄の一単位と考えられる。

遺物（第13図111・112） 杯蓋？（111）、杯身（112）のみ図示し得た。遺物は古墳時代後期に属する。

第2節 2区

重機掘削による破損、あるいは消滅の程度は第1調査区より激しい。本調査区南西隅の状況が本来の遺構密度を示している、と考える。つまり、遺構を覆う遺物包含層が残っていたのは西南隅の最も低くなった田圃1枚部分のみであり、等高線に沿って築造されたそれより1段高くなつた田圃部分では遺構面が若干削平をうけた状態、さらにそれより1段高い田圃部分では遺構面が著しく削平をうけた状況であった。前2者で多数の遺構を検出したが、後者では皆無に近く、極めて深いピットが残るのみである。本来は南西隅程度の遺構密度を有したはずで、そのことは北側断面で確認している。

現地での本来の傾斜は、北東から南西方向に落ちる。遺構としては、掘立柱建物16棟の他、本来建物を構成したであろう多数の柱穴、溝、土坑、落込み、および部分的に平安時代のピットを確認した。遺構はすべて地山面で検出している。掘立柱建物はやはり古墳時代後期から奈良時代のものがあるが、前者は地形に規制されて築造しているため、その識別は比較的容易である。

掘立柱建物201 梁行2間（約2.5m）、桁行2間（約3.0m）の小型の総柱建物であるが、歪みが著しい。傾斜に直交する方向を軸線方位とすれば、N37°W。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物202と重複するが、先後関係は不明。

遺物（第20図1・2） 杯蓋（1）、杯身（2）がある。建物の南西隅の柱穴から出土したもので、古墳時代後期の中で理解できる。

掘立柱建物202 梁行2間（4.0m）、桁行3間（6.8m）の側柱建物で、北面と南面に庇を有する。庇柱を入れれば、 $8.65 \times 6.7 \sim 6.9m$ の規模になる。

軸線方位は、N84°W。柱穴掘り方は円形。庇柱と身舎中心柱の掘り方、柱径は身舎側柱のそれより明らかに小さい。中世を除外すれば、本遺跡で庇を有する建物は掘立柱建物101と2例である。

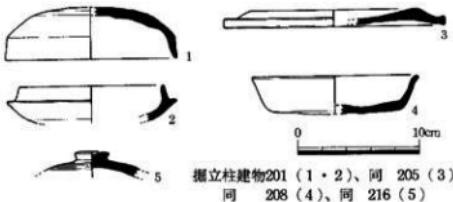
掘立柱建物203 2間四方（ $3.2 \times 3.2m$ ）の総柱建物。軸線方位は、N37°30' W。柱穴掘り方は円形。

掘立柱建物204 梁行2間（3.2m）、桁行3間（4.55m）の建物で、身舎内の軸線上にピット1を有する。軸線方位は、N57°30' E。柱穴掘り方は円形。

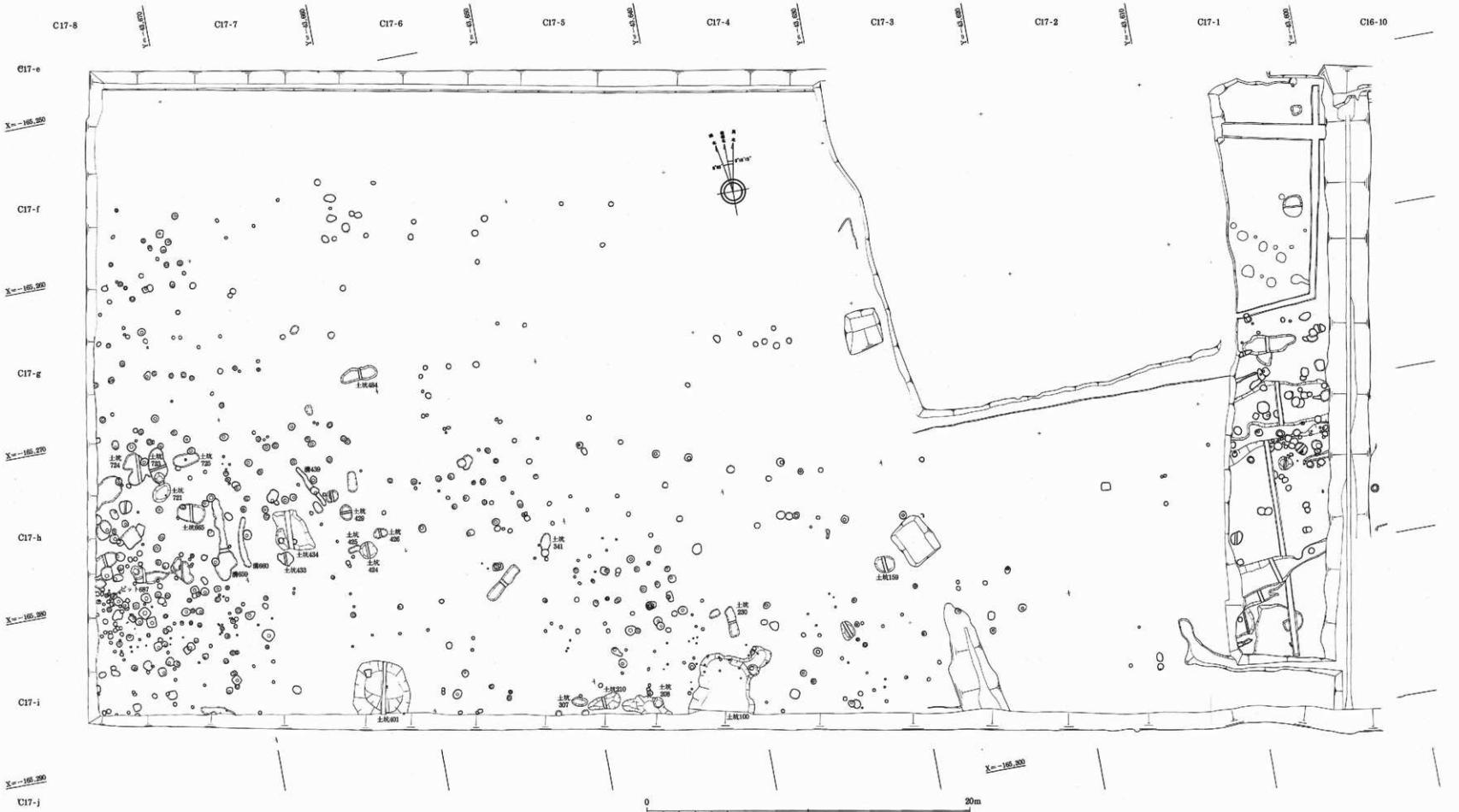
掘立柱建物205 梁行2間（3.05m）、桁行3間（5.3m）の建物で、身舎内の軸線上にピット1を有する。軸線方位は、N4°E。柱穴掘り方は円形。

掘立柱建物208 の柱掘り方と重複関係にあり、本建物が古い。

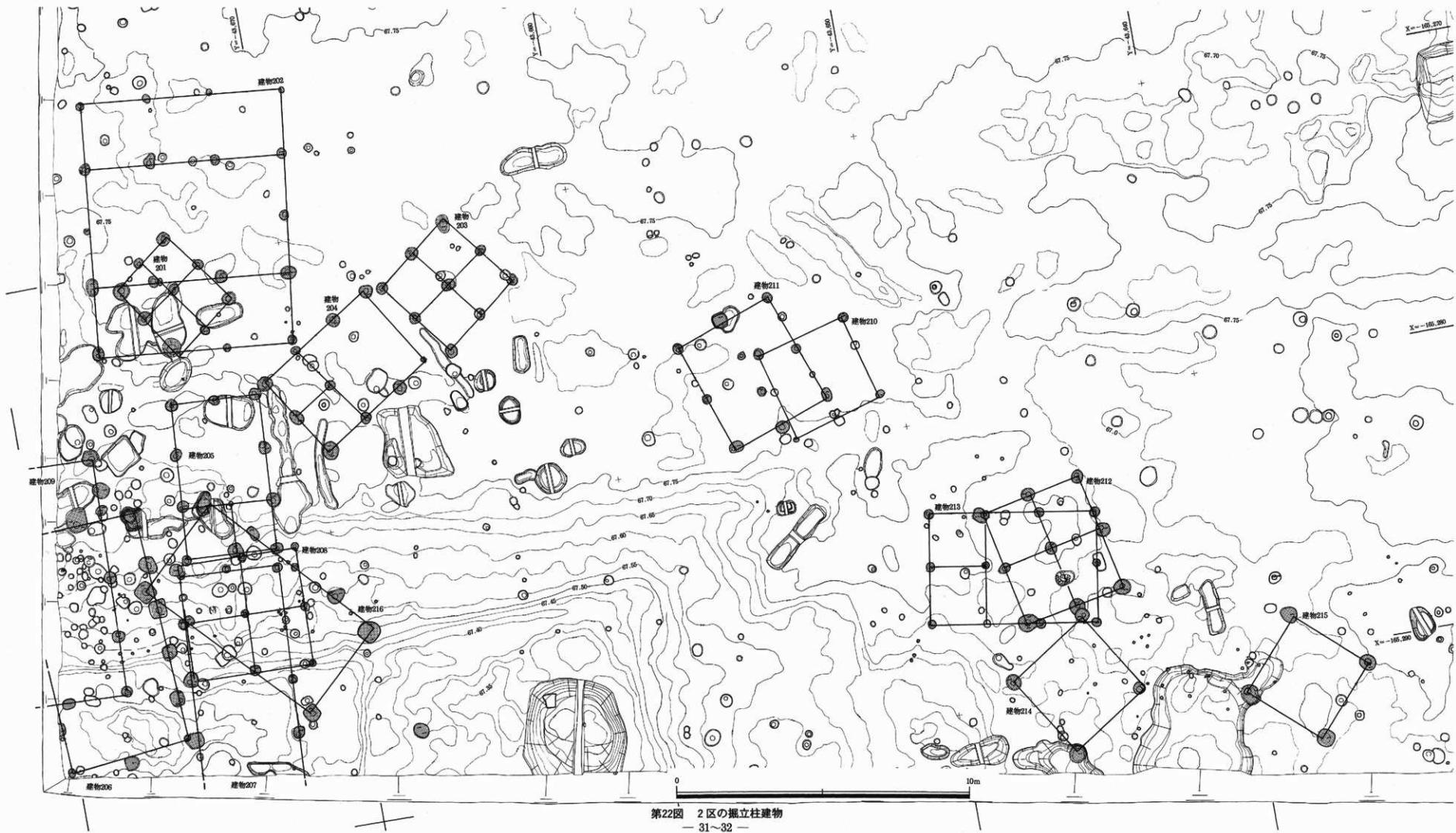
遺物（第20図3） 建物北列中間の柱



第20図 2区 掘立柱建物出土遺物



第21図 2区 平面図
— 29~30 —



第22図 2区の掘立柱建物
—31~32—

穴から出土した蓋（3）である。奈良時代に属する。

掘立柱建物206 梁行2間（4.1m）、桁行5間（約7.95m）の側柱建物。軸線方位は、N 3°W。柱穴掘り方が方形の大型建物であり、側柱列柱間が梁方向に比して極端に短いことが特徴である。南東隅柱掘り方が掘立柱建物207と全く重複するが、207が円形掘り方であることからすれば、本建物が新しい。また掘立柱建物209、217とも重複するが、先後関係は不明。

掘立柱建物207 梁行2間（3.4m）、桁行4間以上の側柱建物。軸線方位は、N 4°E。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物206、208、217と柱穴が重複するが、現地でのどの建物の柱かの認定は微妙であった。掘立柱建物217→208→207→206の変遷と考える。東側柱列は掘立柱建物205と柱筋が合致する。

掘立柱建物208 1間四方（4.1×4.0m）の総柱建物で、やや大型に属する。軸線方位は、N 1°30' E。柱穴掘り方は、建物規模に比して小型の円形。

遺物（第20図4） 建物北列中間の柱穴から出土した杯（4）である。底部内面は不正方向ナデ、底部外面は未調整。

掘立柱建物209 梁行2間以上、桁行4間（8.1m）の側柱建物と考えられる。軸線方位は、N 2°E。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物206と重複するが、先後関係は不明。

掘立柱建物210 1間四方（3.15×3.1m）の建物の可能性が高い。軸線方位は、N 15°W。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物211と重複するが、先後関係は不明。なお、掘立柱建物214、215とはほぼ同一規模になる。

掘立柱建物211 梁行2間（3.55m）、桁行2間（4.0m）の側柱建物と考えられる。中間柱はないが、南北軸線上にピット2が並び、伴う可能性もあるが確証はない。軸線方位は、N 19°W。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物210と重複するが、先後関係は不明。

掘立柱建物212 梁行2間（3.5m）、桁行2間（4.1m）の総柱建物。軸線方位は、N 11°30' W。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物213、214と重複し、本建物が最も古い。なお建物の軸線上に性格不明のピットがある。浅く凹めた程度のピットで、中心に平坦面を有する勾玉形の砂岩とその空間を埋めるように別の石を水平に据え、さらに周囲をC状にこぶし大の砾石を巡らせるものである。なお、中心の石の平坦面はザラザラになり、東端の砾石は砥石片。掘立柱建物213に伴う可能性もある。

掘立柱建物213 梁行2間（3.8m）、桁行3間（5.7m）の建物で、身舎内の軸線上にピット1を有する。軸線方位は、N 81°W。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物212と重複関係にあり、本建物が新しい。

掘立柱建物214 1間四方（約3.2×3.2m）の建物。今回調査の建物では、柱間隔が最も長いものである。軸線方位は、N 32°W。柱穴掘り方は円形。掘立柱建物212の柱掘り方を切っており、本建物が新しい。掘立柱建物215、210と、ほぼ同一企画、同一規模である。

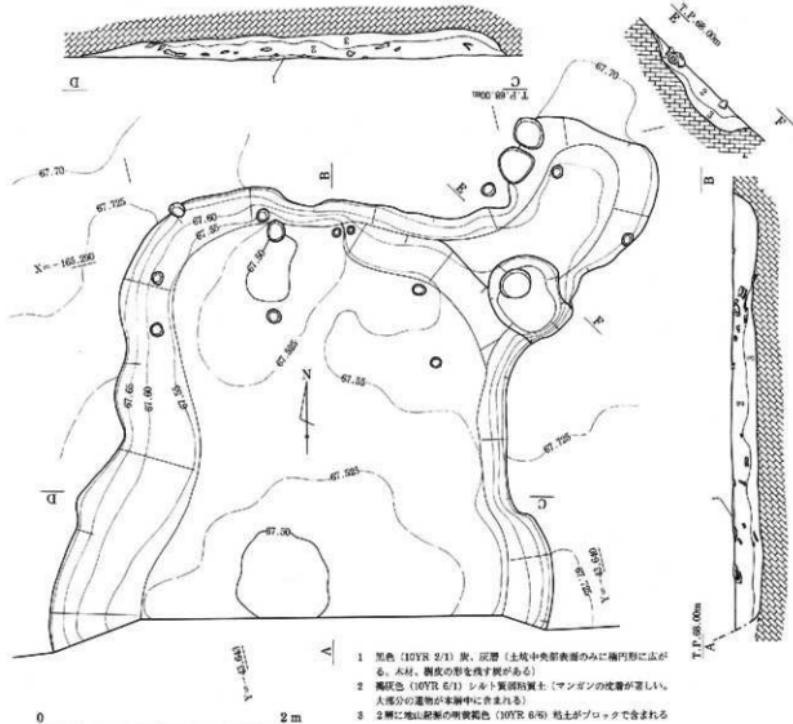
掘立柱建物215 1間四方（約3.0×3.0m）の建物。軸線方位は、N 48°W。柱穴掘り方はやや大

きな円形。土坑100と重複しており、本建物が古い。しかし、柱掘り方埋土上を土坑100の遺物が覆うものの、柱部分には遺物がないことからすれば、同時存在の可能性もある。土坑100を挟んで、西に隣接する掘立柱建物214、および210と類似する。

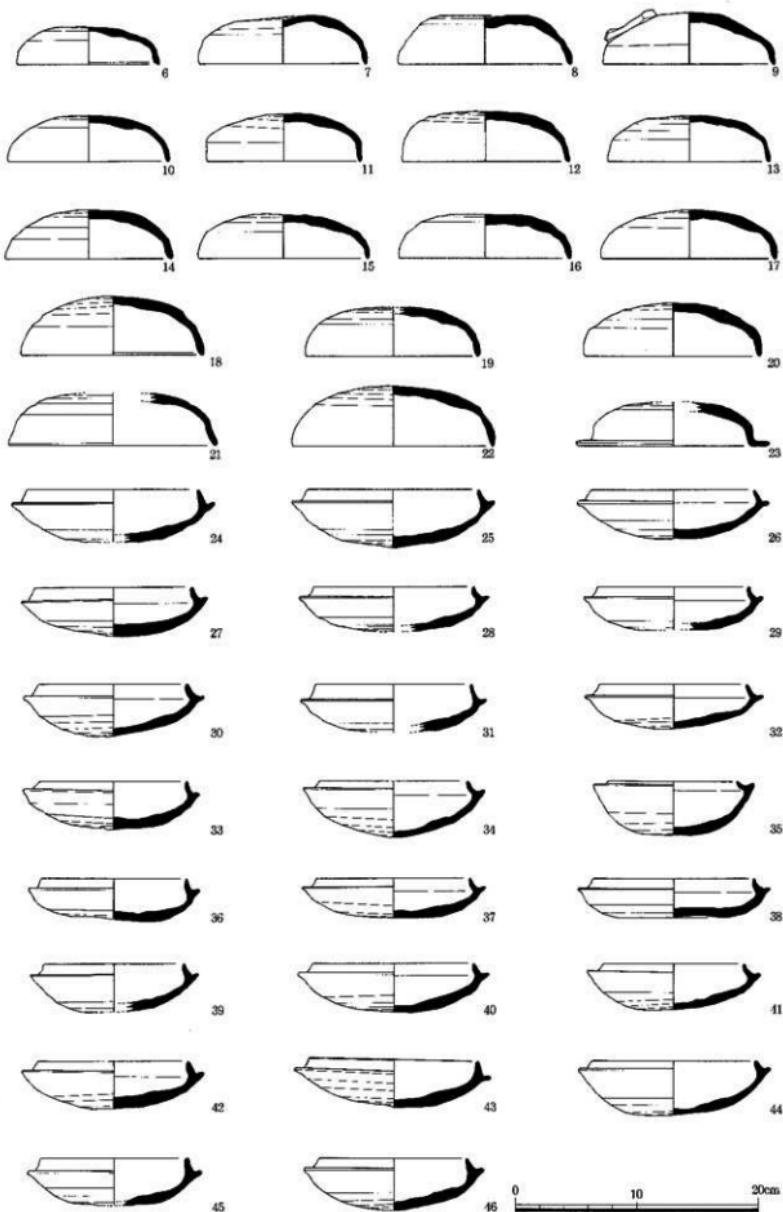
掘立柱建物216 梁行1間（約3.7m）、桁行4間（7.0m）の側柱建物。軸線方位は、N 43°W。四隅の柱穴掘り方は方形、他は円形。調査区南西隅は遺物包含層も厚く、ほとんど削平も及んでいないにも関わらず、軸線上の中間柱と、南側柱列の南2本目の柱穴が確認できない。軸線上で梁長とほぼ同じ位置に柱穴があり、独立棟持ち柱の可能性もあるが、確証はない。

遺物（第20図5） 建物東側柱列の北端柱穴から出土した有蓋高杯の蓋（5）である。古墳時代後期に属する。

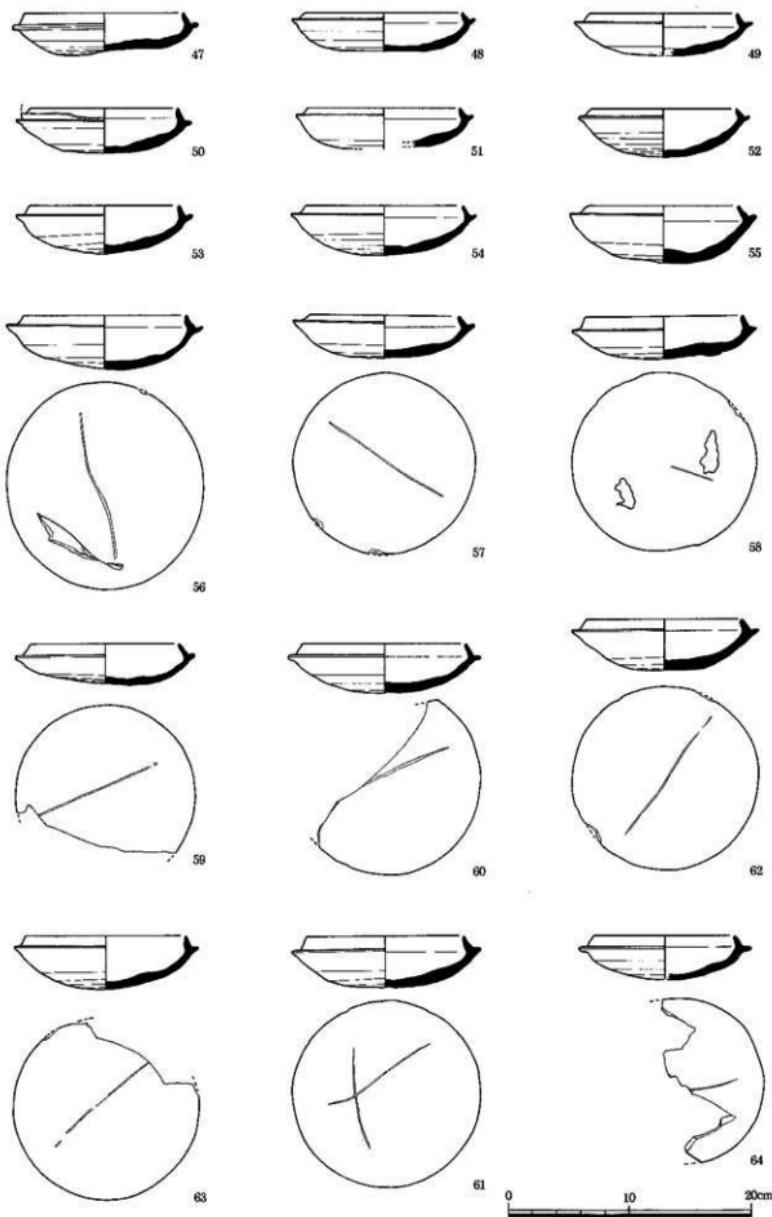
土坑100 不定形な大土坑であるが、いくぶん長方形ぎみの本体と角に張り出しを有するように見える。深さ20~25cm程度で、底部は平坦である。張り出し部は、緩やかな傾斜をもって終わる。埋土は3層で、第1層は土坑中央部表面に薄く梢円形に広がる炭、灰層で、木材、樹枝の形狀を残すものを含む。第2層は本遺跡では一般的な褐色（10YR 6/1）シルト質弱粘質土で、



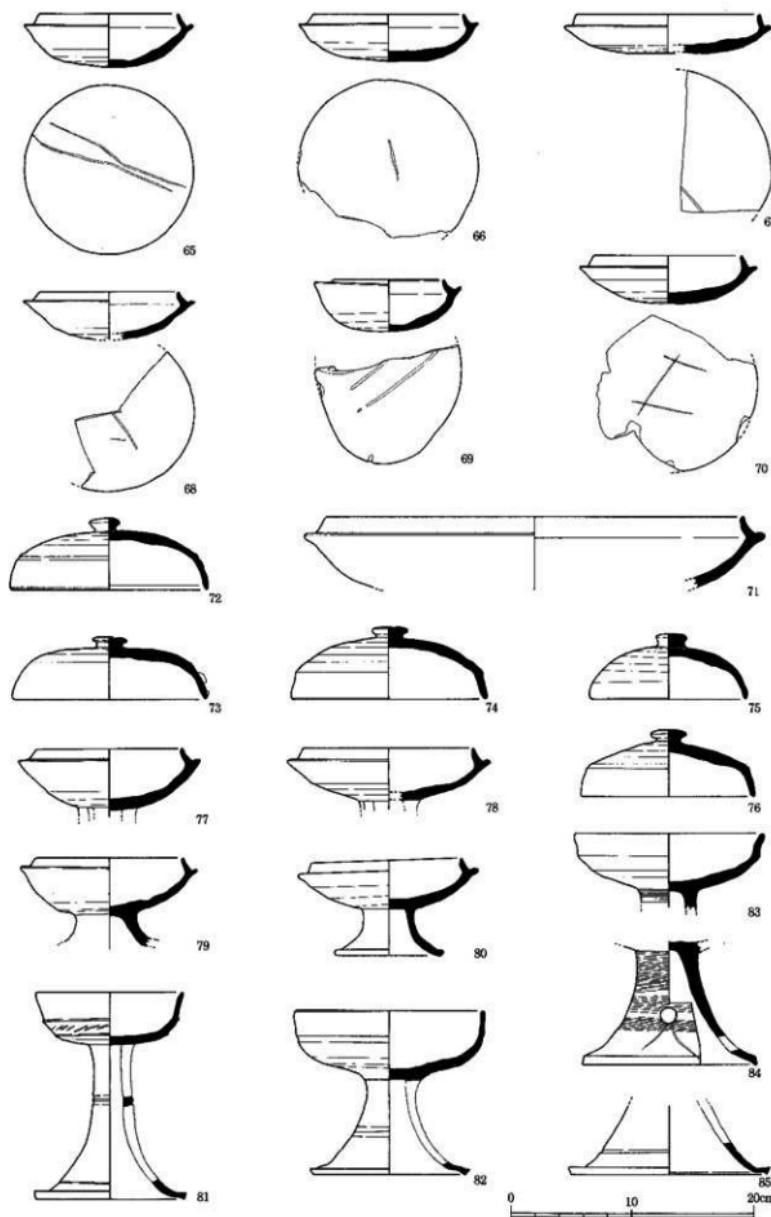
第23図 2区 土坑100平面図・断面図



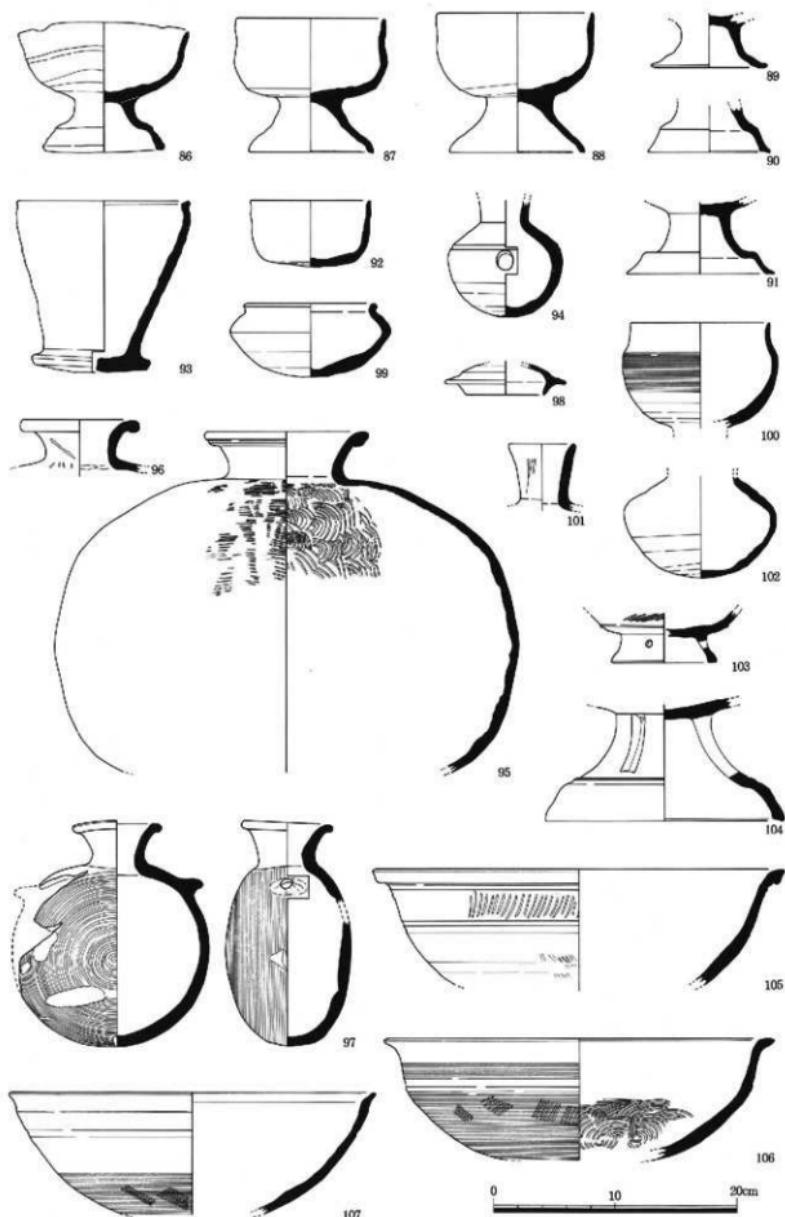
第24図 2区 土坑100出土遺物 (1)



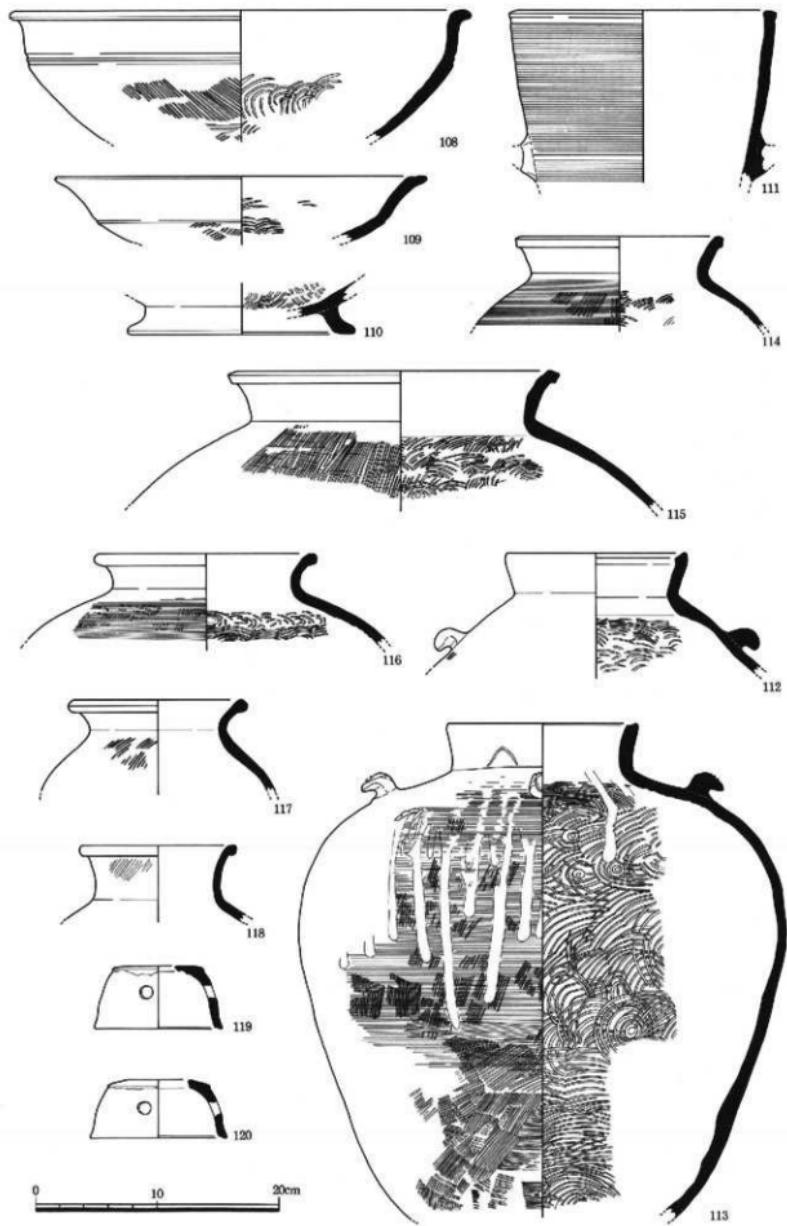
第25図 2区 土坑100出土遺物 (2)



第26図 2区 土坑100出土遺物 (3)



第27図 2区 土坑100出土遺物(4)



第28図 2区 土坑100出土遺物（5）

大部分の遺物が本層に含まれる。第3層は、2層に地山起源の明黄褐色粘土ブロックを含むもので、地山面に密着した遺物もある。多量の須恵器を含んでおり、生焼け、焼け歪み、破損品を廃棄した遺構である。

遺物（第24図6～46、第25図47～64、第26図65～85、第27図86～107、第28図108～120） 杯蓋（6～23）、杯身（24～71）、有蓋高杯（72～80）、無蓋高杯（81～83・86～88）、碗（92）、すり鉢（93）、甌（94）、横瓶（95・96）、提瓶（97）、壺（98～104）、器台（105～110）、瓶（111）、直口甌（112・113）、甌（114～118）、焼台（119・120）がある。出土器種としては、杯蓋、杯身は最も多い。窓跡で見られる両者の釉着したものは出土せず、その程度の選別がなされた後の一括廃棄資料である。

杯蓋は、扁平な大型品が主体で、体部と口縁部の間に稜線を残すものは皆無。回転ヘラケズリの範囲は1/2～1/3で、不調整の個体は皆無。口縁端部は、法量に関係なく丸く終わらせており、段あるいは面を形成するものはない。ただし、6のみ例外で小型で口縁端部に面を有しており、壺蓋の可能性も考慮したい。6と11を除外すれば、法量は口径13.2～14.4cm、器高3.6～4.3cmが主体的で、口径15～17cm、器高4.5～4.9cmの大型品（18・21・22）も見られる。23は口縁部を水平方向に引出す特異な形態ながら、本遺跡では10数点が出土している。ツマミを付けて蓋としたり、脚を付けて高杯とする場合があって、それがないと蓋か身かの識別は難しい。

杯身は、立上りは若干外反させつつ、あるいは直線的に内傾させる。端部は丸く終わらせるか尖らせる。やはり回転ヘラケズリの範囲は1/2～1/3で、不調整の個体は皆無。外面底部にヘラ記号を刻するものが多い。口径11.8～13.5cmが主体的で、口径11.4～11.6cmの小型品（39・41・64・68）と、口径13.9～14cmの大型品（24・25・43・67）がある。71は口径34.3cmの特大品で、全面に自然釉が付着する。

有蓋高杯の蓋には、口縁部と体部間に稜線の痕跡を残すもの（72・74）、段の痕跡を残すもの（72・73）がある。杯蓋とは異なり、型式変化が緩やかである。体部は杯身と同じで短脚を付ける。

無蓋高杯（81～83・86～88）は二方スカシが認められ（81・82）、簡略化している。深い碗に短脚を付けたものにはスカシはない。

個体数の少ない器種に、碗（92）、すり鉢（93）、甌（94）、横瓶（95・96）、提瓶（97）等があり、壺（98～104）はバラエティーに富む。甌は頸部は細く、無文。提瓶の把手は形骸化。

器台は刺突文（105）、凹線（105・107・108）、カキ目（106・107）が見られるのみで、無文化が著しい。短い脚（110）が付くらしく、土坑434の142の先行形態と考えられる。

瓶は、全面カキ目。焼成はあまく、軟質である。

直口甌は、肩部に一对の「L」状の把手を有し、口縁端部には内傾する面を有す。やはり、土坑434の141の先行形態と考える。

甌は、口径13～26cmで、通常の分類では小型である。文様は施さず、口縁端部を方形にするも

の（114・115）と、丸く肥厚させるもの（116～118）がある。

焼台は、三方に円孔をあけ、天井部は未調整である。

土坑208 長さ3.2m以上の不定形土坑。埋土は2層で、上層が通有のマンガン斑のあるにぶい黄橙色シルト質弱粘土、下層がそれに地山起源の粘土ブロックが入るもの。遺物は上層から、6世紀代後半の須恵器が出土しており、完形品が多い。なお、埋土除去後に掘立柱建物214のピットが確認できた。

遺物（第30図121～136） 杯蓋（121）、杯身（122～130）、壺（131～133）、すり鉢（134・135）、甕（136）がある。

杯蓋は、体部と口縁部の間に稜線を残さず、口縁端部は丸く終わらせる。

杯身は、立上りは若干外反させつつ、あるいは直線的に内傾させる。端部は丸く終わらせるか尖らせる。やはりすべての個体に回転ヘラケズリが認められる。

壺には、長頸壺（131）と短頸壺（132・133）がある。後者は体部下半がヘラケズリ、他はヨコナデ仕上げである。

すり鉢は、両者ともに細い穿孔がなされている。底部外面は未調整で窓壁細片が付着したままのもの（134）と、雑なヘラケズリ仕上げ（135）である。

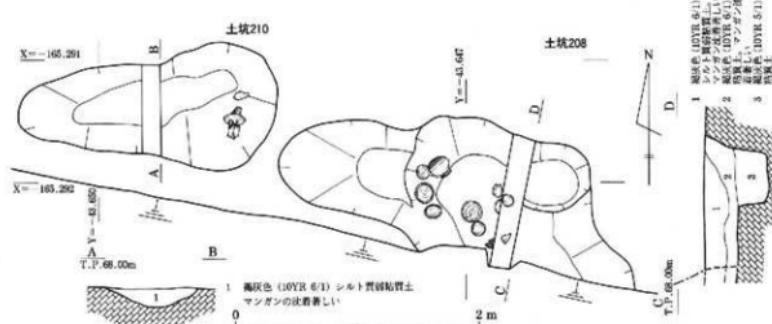
甕は、文様は施さず丸く肥厚させる。

土坑210 2.10×1.04m、深さ14cmの梢円形土坑。断面形態は、浅い皿状。埋土は、通有のマンガン斑のあるにぶい黄橙色シルト質弱粘質土の1層。須恵器が東端部に集中して出土している。

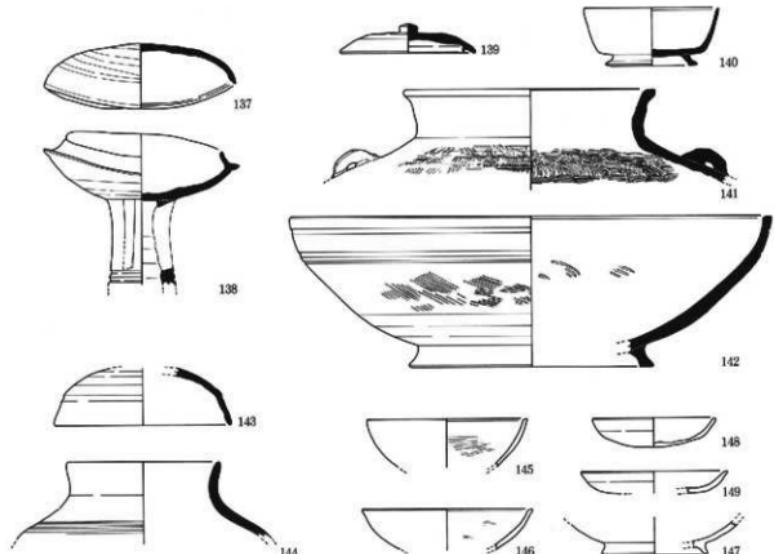
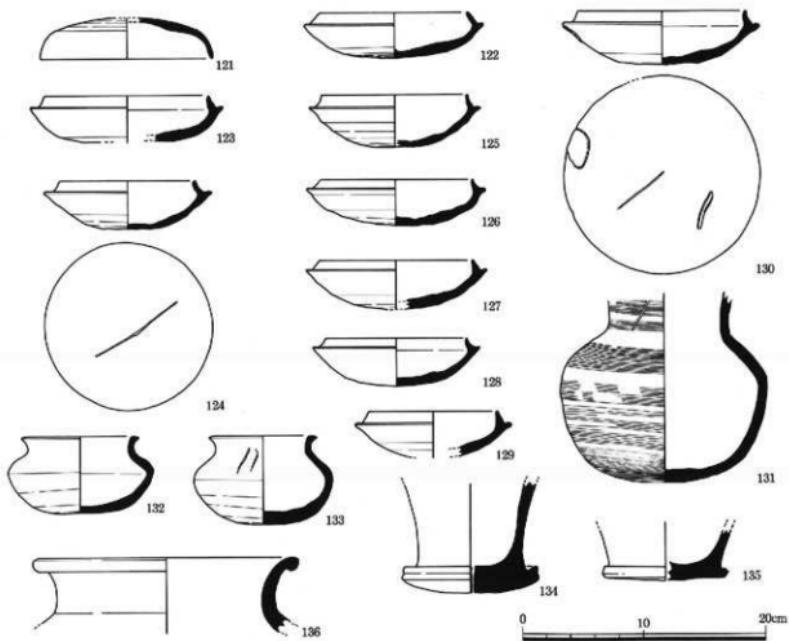
遺物（第30図137・138） 杯蓋（137）、有蓋高杯（138）がある。両者ともに、焼け歪みが著しい。

杯蓋は、体部と口縁部の間に凹線を巡らせ、口縁端部内面には弱い段が残存している。

有蓋高杯は、長脚二段の三方スカシを有するものである。



第29図 2区 土坑208・210遺物出土状況 (1/40)

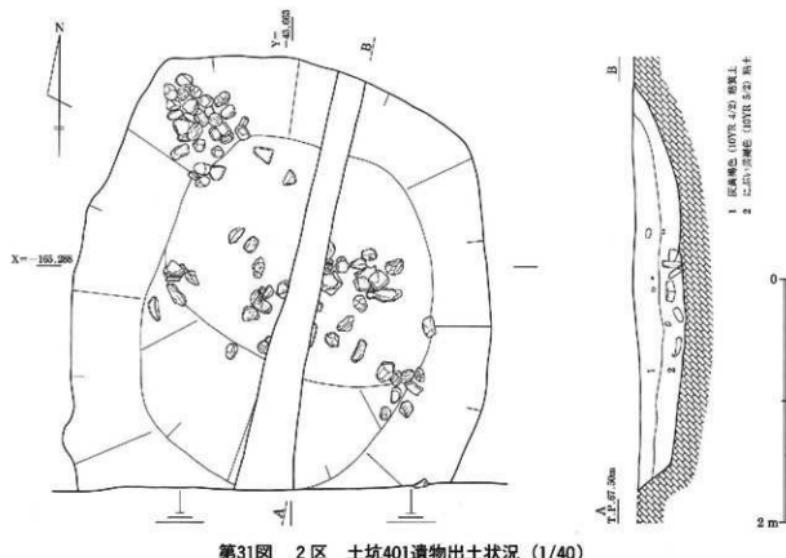


土坑208 (121~136)・210 (137・138)・434 (139~142)・721 (143・144)、ピット687 (145~149)

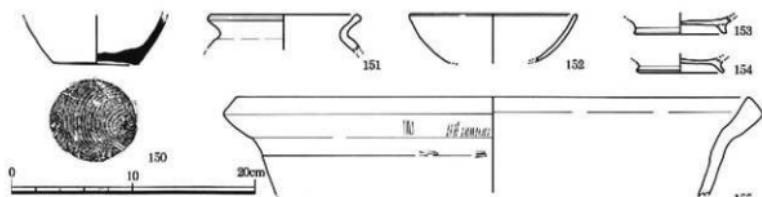
第30図 2区 土坑他出土遺物

土坑401 大型の椭円形土坑。南部分は調査区外で正確な規模は不明ながら、長約4.2×短3.4m程度である。断面形態は、スリ鉢状に窪み、最深部で深さ40cm程度である。埋土は2層で、第1層（上層）はマンガン粒の入る灰褐色（7.5YR 6/2）粘質土に地山起源の橙色（7.5YR 6/8）粘土小ブロックを含む人為的な埋立て土である。第2層（下層）は、自然堆積の褐灰色（7.5YR 6/1）弱粘土である。第2層から、コブシ大～子供頭大の亜円礫、角礫が多数出土している。出土状況から、北西隅から南東方向に投込んだものであり、多くのものが被熱しており、加工のある焼灰岩片、砥石各数点を含む。上層には図示しえるものはないが、遺物細片が比較的多く、黒色土器、底部糸切りの須恵器、瓦質土器がある。

遺物（第32図150～155） 糸切り底の須恵器（150）、土師器甕（151）、黒色土器（152～154）、瓦質土器（155）がある。



第31図 2区 土坑401遺物出土状況 (1/40)



第32図 土坑401出土遺物

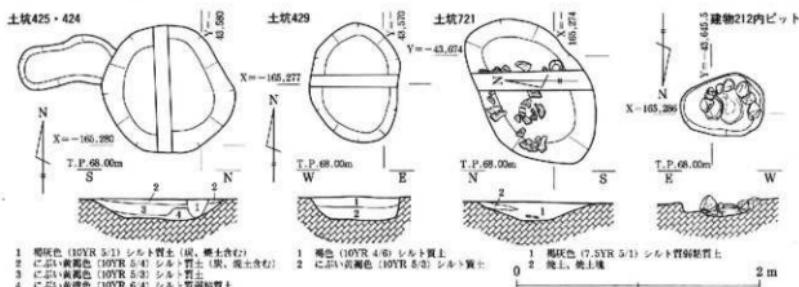
糸切り底の須恵器は、内外面とも回転ヨコナデ仕上げ。同じものがもう1点出土している。

黒色土器はいずれも碗で、内黒A類である。摩滅が著しく、調整は不明。

土坑424 1.10×1.05m、深さ18cmのはば正円形の土坑。断面は、浅くスリ鉢状を呈す。埋土は大きく見ると、上下2層である。下層は通有のシルト質弱粘土。上層には多くの炭と、若干の焼土塊を含み、古墳時代後期の須恵器が出土するが、生焼け品が目立つ。土坑425と切りあうが、両者ともに、生焼け品が入ることが特徴である。

土坑425 長さ0.75m以上、幅0.35m、深さ5cmの浅い土坑。埋土は、通有のシルト質弱粘土。遺物は、古墳時代後期の生焼けの須恵器壺のみが出土した。

土坑429 1.0×0.72m、深さ20cmの梢円形土坑。急角度に掘り込まれ、底部は平坦である。埋土は2層。7世紀代の須恵器杯蓋が出土している。



第33図 2区 土坑423・424・429・721

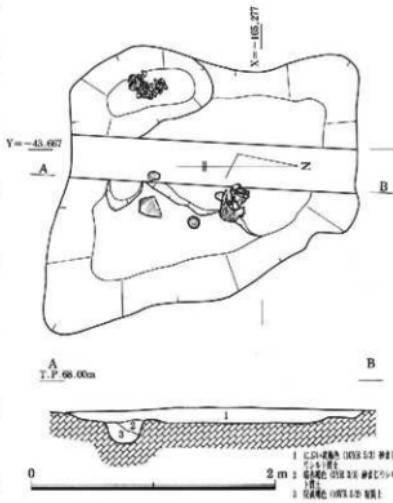
土坑434 2.4×2.2m程度、深さ15cmの不定形土坑。底部は平坦であるが、南西隅が窪む。埋土は1層で、褐灰色(10YR 6/1)シルト質粘土。7世紀代の須恵器杯蓋が底部に密着して出土している。

遺物（第30図139～142） 蓋（139）、杯（140）、直口壺（141）、器台（142）がある。これらは混在ではなく、T K217段階の一括資料と考えている。

蓋は、天井部に回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。内面には一方向のナデ仕上げ。

杯は、裾部よりかなり内側に高く踏張った形態の高台を付けている。

直口壺は、一对の環状把手を付ける。口縁端部は若干横方向に引出して、丸く終わらせる。



第34図 2区 土坑434遺物出土状況 (1/40)

土坑100の112・113と同一系統の資料である。

器台は、口縁端部に若干内傾する平坦面を有する大型鉢に、140に共通する高台を付ける。口縁外面に凹線を巡らせる。土坑100の110が同一系統の資料であろう。

土坑721 1.35×0.93m、深さ13cm程度の卵形土坑。

遺物（第30図143・144） 杯蓋（143）、短頸壺（144）がある。

杯蓋は、体部と口縁部の間に凹線を巡らせ、口縁端部は丸く終わる。

短頸壺はヨコナデ仕上げ、肩部はカキ目である。

ピット687 調査区南西隅で検出した直徑19cmのピット。黒色土器が出土しており、平成8年度の尾根筋中腹部での調査（第4区）でもほぼ同時期と考えられる遺構、遺物が確認されている。今回の調査での当該期のものは唯一である。

遺物（第30図145～149） 黒色土器（145～147）、土師器（148・149）がある。

黒色土器の器種は碗。内面ヘラミガキが認められるが、いずれも細片で摩滅が著しい。145は内黒A類。他は不明。土師器小皿は口縁部がヨコナデ、他はナデ仕上げ。摩滅が著しい。

第3節 3・4・5区

3区・4区・5区は、2区の西側、6、7区の東側に位置する。調査に入った時点では、わずかに3区の北東側の一部が旧地表面を残していたのみであった。後はすでに各区とも基盤整備が終了し、後は耕作土を敷きならすのみの状態となっていた。各調査区とも、東側は切土され、西側は、その土を利用して盛土されていた。また、東側法面には、包含層や遺構の断面が確認できた。旧地形図を見ると、5区南東部及び4区北東部の標高を最高とし、北、西、南に向かって傾斜している。旧地形から計算すると、東側は1.5mも削平されている。

3・4・5区については、農林水産部から耕作地としての基盤整備が終了しているので、地形を改变するような大きな掘削は行わないよう依頼されていた。このため、調査区東側から遺構検出作業を実施し、地山が旧地表面や包含層の下にもぐり込む所で、遺構検出作業を中止し遺構の掘削を行った。各区とも包含層、遺構が西、南に続いていることは確実であったが、当初の協議結果に基づき、調査はこの範囲に止めざるを得なかった。

3区・4区・5区からは、柱穴、溝、土坑を検出したが、遺構が残存していたのは、各調査区とも西側約3分の1から4分の1程度であった。出土した遺物はほとんどが須恵器であり、時期的には6世紀後半にあたる。検出した柱穴から掘立柱建物は復元できなかった。今回は、遺構の残存がいちばん良好であった3区、特に須恵器が廃棄されていた溝2、土坑13を中心に報告したい。

溝2（第36図） 溝2は、C17-b 7・8・10、C18-b 1・2・3から検出した。この間約20mほど検出できないが、これは削平のためである。検出した長さは、削平された部分も含めると57m、幅は0.5mから1.5mである。深さは0.2mである。7層に分層できる。

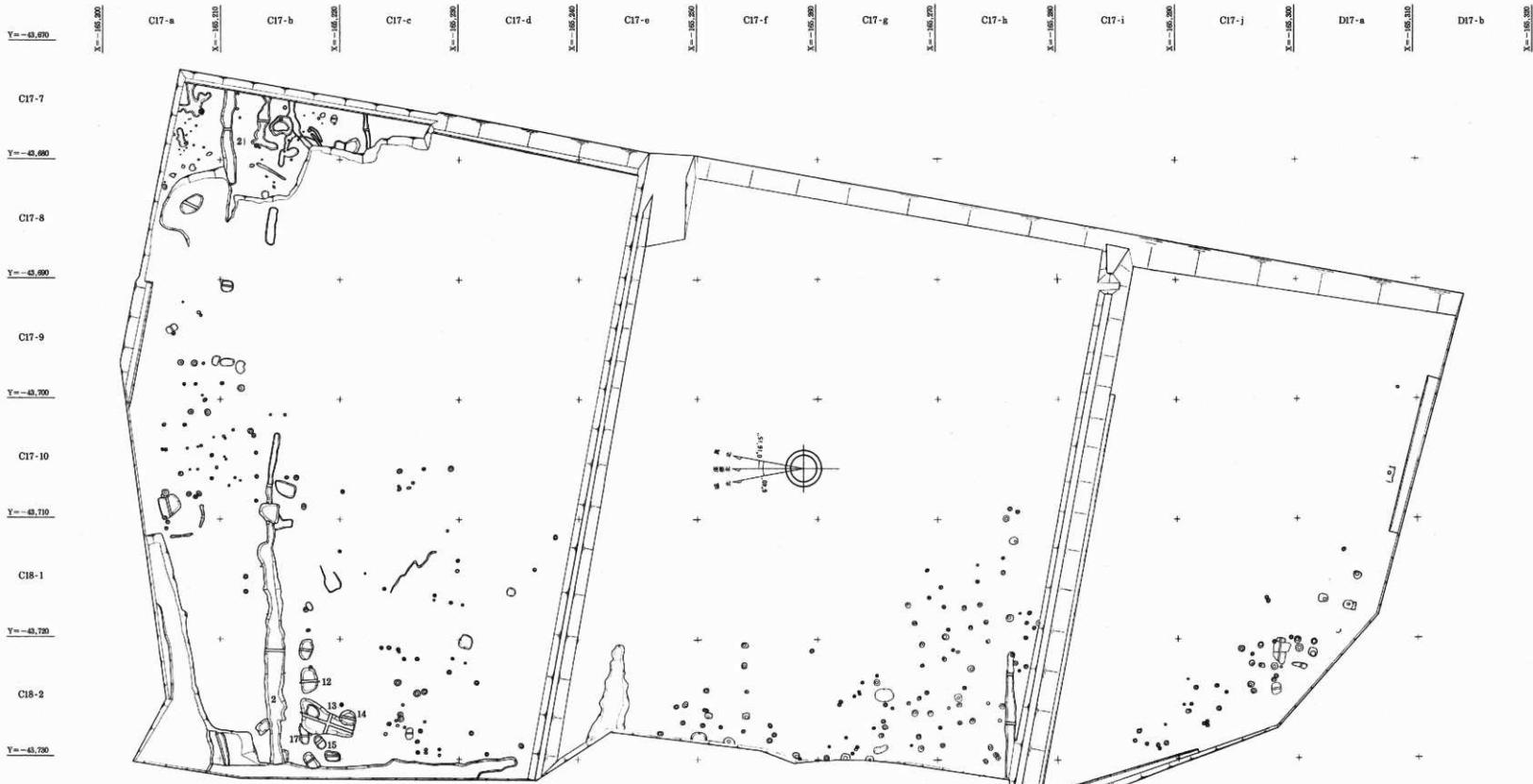
遺物（第39図1～31、第40図33～42） 溝2からは多量の遺物が出土したが、特にC18-b 1+4～8m及びC18-b 2+2～3mの2ヶ所に遺物が集中して廃棄された状態で出土した。C18-b 1+4～8mから出土した遺物を上器群1、C18-b 2+2～3mから出土した遺物を上器群2として取り上げた。

溝2から出土した遺物は、ほとんどが須恵器である。また、器種は杯身、杯蓋が多く、土器群1ではそのほとんどが杯身、杯蓋である。上器群2でも、現場で図化したものは須恵器の甕1点であるが、杯身、杯蓋が多量に出土した。今回は、土器群1、2とも杯身、杯蓋（1～17、33～36）以外の遺物を主に図化した。埴（21～24・40）、有蓋高杯（25、37）、無蓋高杯（26・27・38）、甕（28・30・41・42）、提瓶（29）、瓶（32）、甕（39）である。31のみ土師器甕である。

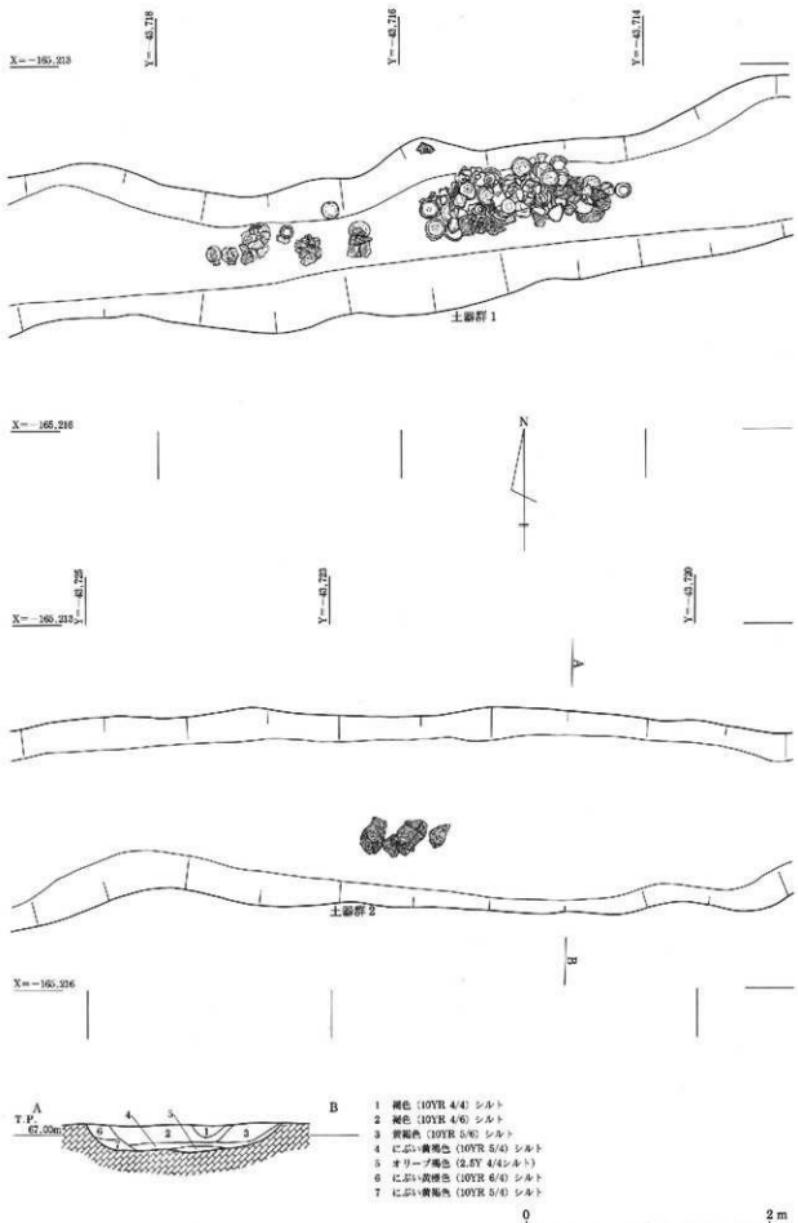
土坑12（第37図） 土坑12は、C18-b 3から検出した。規模は、長辺約2.1m、短辺約1.4mの不整な方形を呈し、深さは約0.25mである。3層に分層できる。

遺物（第40図43～45） 遺物は、他の遺構に比べると少ない。また、杯身、杯蓋が少ないことも特徴である。今回は、有蓋高杯（43）、甕（45・46）の3点を図化した。

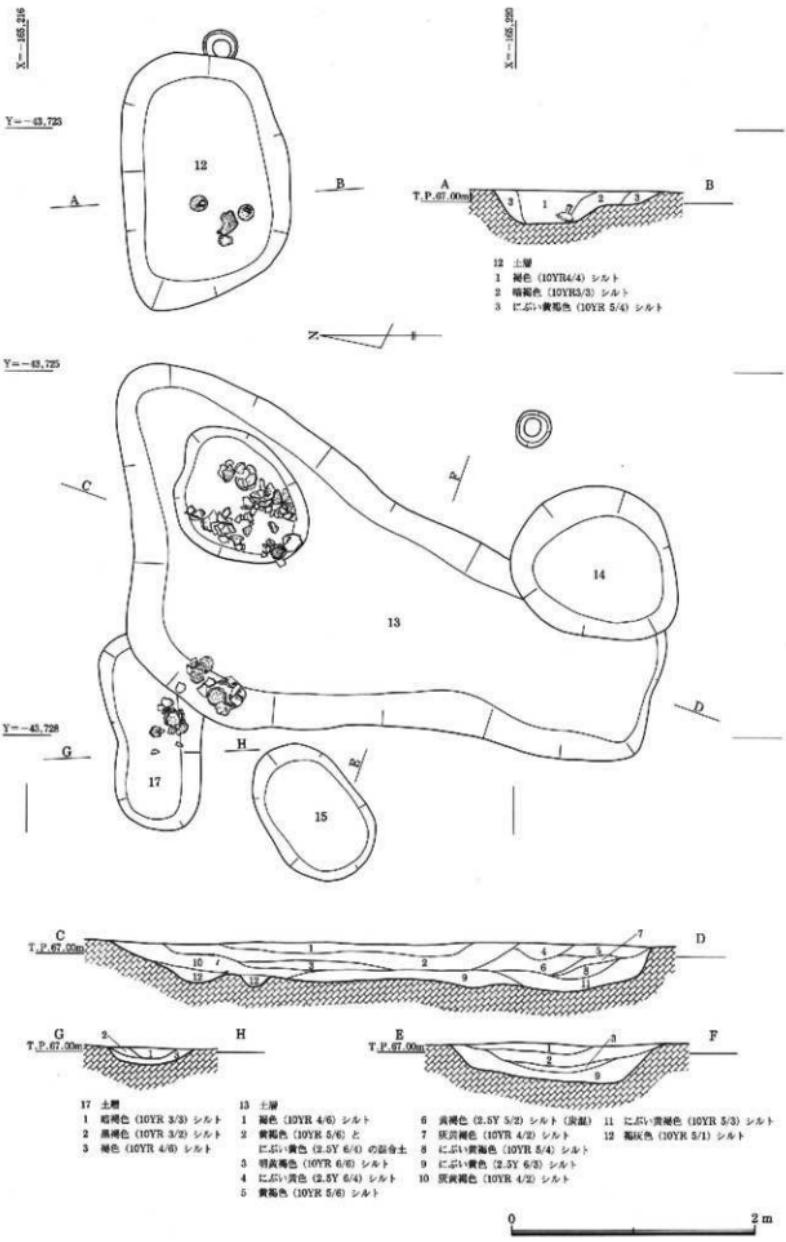
土坑13、17（第37図） 土坑13、17は、C18-b・c 3から検出した。土坑13の規模は、長辺約



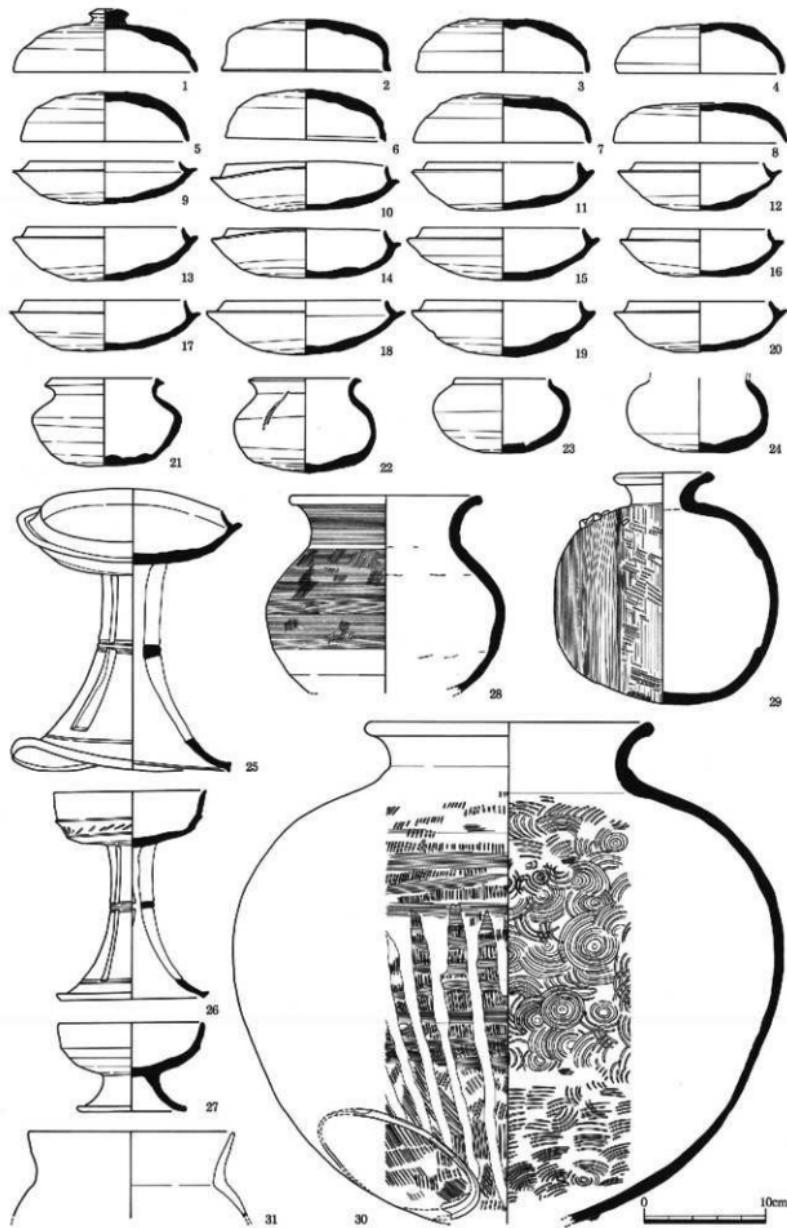
第35図 3・4・5区 平面図
— 47~48 —



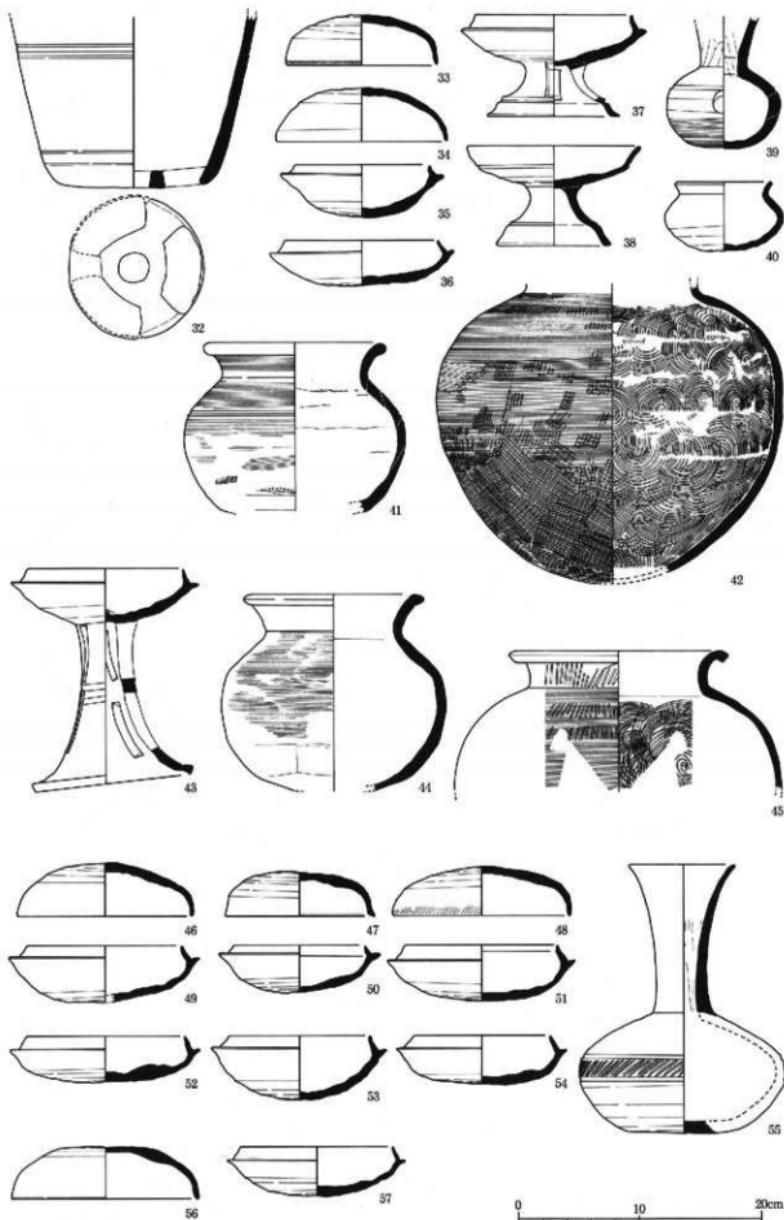
第36図 3区 溝2遺物出土状況



第37図 3区 土坑12・13・17遺物出土状況



第38図 3区 溝2土器群1出土遺物



第39圖 3區 清2土器群1 (32)、土器群2 (33~42)、土坑12 (43~45)、土坑13 (46~55)、土坑17 (56+57) 出土遺物

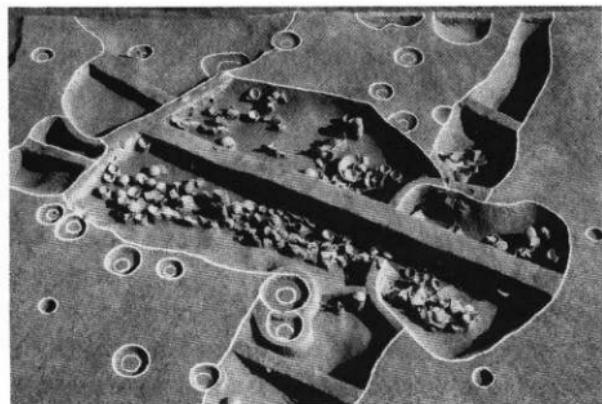
4.6m、短辺約2.0mの不整な方形を呈し、深さは約0.25mである。12層に分層できる。遺物は北西側及び土坑17に近接したところから出土した。

土坑17は、土坑13に切られている。規模は、長辺約1.6m、短辺約0.7mの不整な椭円形を呈し、深さは約0.16mである。3層に分層できる。遺物は土坑13に近い東側に集中して出土した。

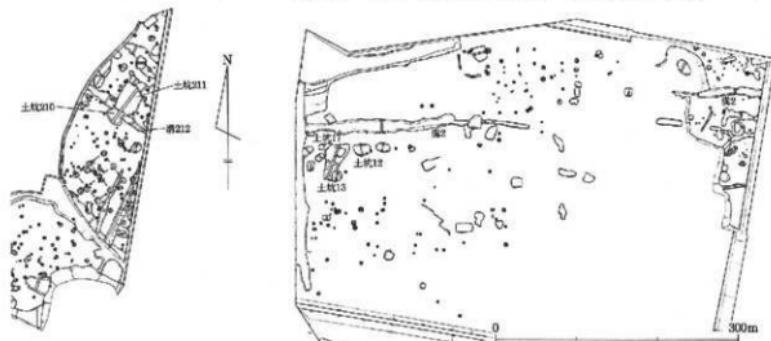
遺物（第40図46～57） 土坑13、17は、溝2に比べれば遺物の出土は少なかった。器種としてはやはり杯身、杯蓋が多い。土坑13から杯蓋3点（46～48）、杯身6点（49～54）、長頸壺（55）、土坑17からは杯蓋（56）、杯身（57）の各1点を図化した。

3区から検出した溝2、土坑12、13、17は、遺物の時期が同一であること、遺物が大量に廃棄されていた状況、距離が20mほどしか離れていないことなどから、6区から検出した溝212、土坑210、土坑211と一連の遺構と思われる。特に溝2は溝212と同一の遺構である。

このなかで溝2は、杯身、杯蓋が何枚か重ねられた状況で廃棄されているのがわかる。これは、他の遺構では乱雑に廃棄されているのに比べ特徴的な状況を示している。



第40図 6区 溝212、土坑210・211遺物出土状況



第41図 3区・6区 遺構検出状況図

第5章 まとめ

1) 挖立柱建物の時期について

1区では12棟、2区では16棟の掘立柱建物を検出した。陶器南集落の変遷を考えるには、これらの築造時期を明らかにすることが基礎的な作業であるが、一部を除いて容易ではない。すなわち、調査地は古墳時代後期の大集落であり、膨大な量の須恵器を含む包含層が形成されており、後に築造された建物でもその柱穴に含まれる遺物の大部分にはそれらが入ることになるからである。ここでは出土遺物、地形傾斜と方位、柱掘り方の形状、遺構の切り合い関係等を手がかりにその概略を述べる。

a) 出上遺物から、掘立柱建物の時期を確定することは困難である。ただし掘立柱建物101・205・208からは奈良時代の遺物が出土しており、今回の調査では一部に平安・鎌倉時代の遺物を含むものの、それらは微量であることからすれば、それが築造時期を示す可能性は高い。

b) 建物には地形の傾斜に沿ったものと、南北を意識して築造されたものの二者がある。傾斜方向と南北方向が大きく異なる2区では、その識別が容易で、前者に古墳時代後期以降の遺物の入ることはない。一方、両方向が近接する1区では、その識別が難しい。

c) 柱穴掘り方には、円形と方形の二者がある。柱穴全体を見ても、前者が大部分、後者が少數である。ところで、少數ながら両者の建物が重複（102と103、206と207）する場合、いずれも方形が円形掘方を切る関係にある。

地形の傾斜を考慮しつつ、建物の主軸方向、遺物を検討すれば、多少の重複関係は問題として残るにせよ、本来は大きく三段階程度の建物が混在している、と考えられる。

最も古いものは地形の傾斜に強く規制され、それに直交、あるいは一部平行させて建物を築造する一群で、古墳時代後期に属する。1区では掘立柱建物103・106・110・112、2区では掘立柱建物201・203・204・210・211・212・213・214・215・216が当該期に属する。

問題となるのは、地形の傾斜に関わりなく、南北方向を意識した建物である。例えば、奈良時代の掘立柱建物101は磁北に近いが、遺物から当該期とできる掘立柱建物205・208は東に7~10°振っており一定の「幅」のあることが判る。飛鳥時代と考える掘立柱建物102もその「幅」の中におさまるのであって、その峻別は難しい。

2) 古墳時代後期の集落について

ここにいう古墳時代後期とは、田辺編年のTK43型式の新しい部分からTK209型式であり、6世紀末から7世紀初頭のごく短期間である。杯身、杯蓋に回転ヘラケズリを施さないものは確認できず、南北方向を意識した建物群の所属するであろう遺物群とは明らかに断絶時期が認められる。なお、この断絶時期をはさんで、集落としての性格は全く異なったものになるこも判明した。

従前の調査と総合すれば、古墳時代後期の集落の広がりがほぼ明確になった。現在の式内社陶荒田神社と愛宕神社を結ぶ道路は、遺跡の立地する丘陵を縦断するが、同時にそのラインが地形傾斜の変換点に当たっている。そこより東に向かって急激に高くなり、西には平坦面が続き丘陵先端にいたる。古墳時代後期の集落はその後者にのみ、全面的に立地するようである。なお、今回は南側斜面の状況であるが、平成6年度調査では北側斜面にも展開することが明らかになっている。

倉庫と考えられる1間四方、2間四方の総柱建物は、1区では1棟、2区の南西部で7～8棟を確認している。尾根先端にいくに従い、倉庫の占める割合が高くなるようで、このことは平成7、9年度調査の成果を考慮すれば、さらに明確になる。今の所、先端部では倉庫のみが確認されている。河川を利用した須恵器の搬出入を想定すれば、丘陵の南北の谷を辿れば、陶器川とつながることに関連していよう。これらのことと、多量の須恵器の生焼け、焼け歪み品の出土する廃棄土坑の存在などから、当該期の陶器南遺跡は須恵器の選別、出荷に関わった集団の集落としての性格を持っているようである。

3) 飛鳥～奈良時代の集落について

南北方向を意識して築造された掘立柱建物群の段階である。ただし継続はせず、少なくとも二期の集落が重複している、と考えられる。7世紀代では、落込み97、土坑434、掘立柱建物102等の遺構から前半のTK217程度を想定しており、8世紀代の資料に前半のものが多いとしても、明らかに空白期間を挟んでいるからである。

この二期の遺構、特に掘立柱建物の所属時期の岐別については、今回果たせておらず、調査担当者としての将来の課題としておきたい。現状で窺える特徴は、①掘立柱建物は地形の傾斜に関係なく、東西南北を意識して築造されていること。②掘立柱の柱穴掘り方に方形のものを含むこと。③丘陵中央部で古墳時代後期の掘立柱建物群と重複するものの、丘陵先端には及ばないこと。④須恵器の生焼け、焼け歪み、破損品が見られず、須恵器の数量も比較にならない程に減少すること。⑤奈良時代に至って掘立柱建物101を囲む方形区画が出現すること、等である。

最後に、上記から窺える当該期の陶器南遺跡について述べて、まとめとしておきたい。まず③、④の特徴から、古墳時代後期の陶器南集落と性格が大きく変わったことが重要である。すなわち河川を利用するのに有利な尾根先端からの撤退は、須恵器搬出拠点としての性格の消失と考えられる。また⑧は、有力者の存在を示す。このことは、奈良時代だけではなく、その後の中世にかけての有力者の居館の存在や、「陶器保」の成立が示すように、当地が要衝の地にあったことによると考えられよう。陶器南遺跡は、古代・中世社会においても重要な位置を占めたことがうかがえるのである。

報告書抄録

ふりがな	とうきみみなみいせき	はっくつちょうさがいよう
書名	陶器南遺跡発掘調査概要・V	
副書名	府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査	
シリーズ名		
シリーズ番号		
編著者名	竹原伸次・山田隆一	
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課	
所在地	〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目	☎06(6941)0351
発行年月日	1999年3月31日	

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
			○○○	○○○			
とうきみみなみいせき 陶器南遺跡	とうきみみなみいせき 市陶器北	272019	34° 30' 27"	134° 31' 26"	1997年9月16日 ～ 1998年3月31日	7,850m ²	府営ほ場 整備事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陶器南遺跡	集落遺跡	古墳時代後期 飛鳥時代 奈良時代	掘立柱建物 土坑、溝 掘立柱建物 掘立柱建物、溝	須恵器、土師器 須恵器、黒色土器 須恵器、土師器	

図版



右：陶器南遺跡全景

(西より)

下：1区

(上が北)



図版1
1区

奈良時代の方形区
画他（南西より）



右：掘立柱建物
101他（北より）
下右：溝2遺物出土
状況（南より）
下左： 同上
(北西より)



図版2
1区



落込み40、溝365他
(西より)



右:落込み40遺物出
土状況(西より)
下:調査区西半



図版3
1区
遺物(1)



溝366(17)



溝2(33~)



図版4
1区
遺物(2)

土坑860
(73~103)



土坑97
(104~106)



落込み40
(113~)



図版5
1区
遺物(3)

落込み40
(全)



130



138



135



129



131



207



189



195



209



199



201



200



202



225



203



220



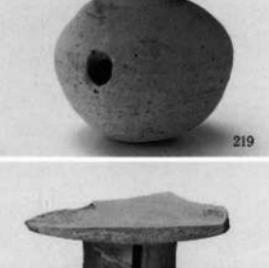
219



218



222



208



223



235



207

図版6
2区

調査区南西隅の掘立柱建物群



右:土坑100遺物出
土状況(南より)
下:土坑100とその周
辺(上が北)



図版7
2区
遺構と
遺物

土坑208 (122~133)



122



130



131



132



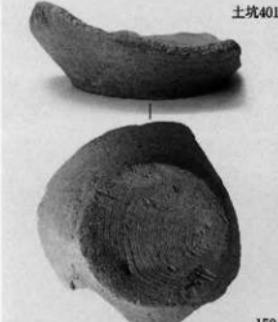
133

土坑434

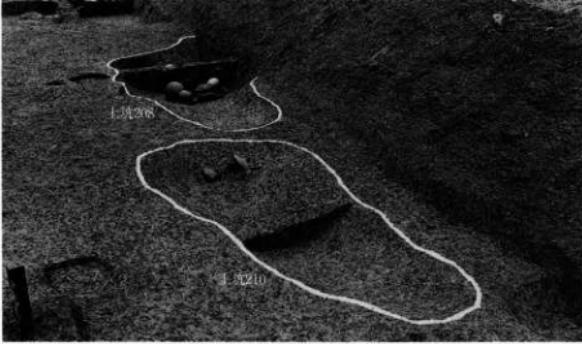


139

土坑401



150



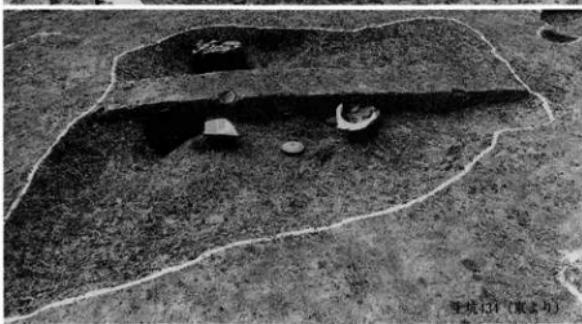
132-208

132-208

土坑208 (遺物)



土坑208 遺物 (土器類)



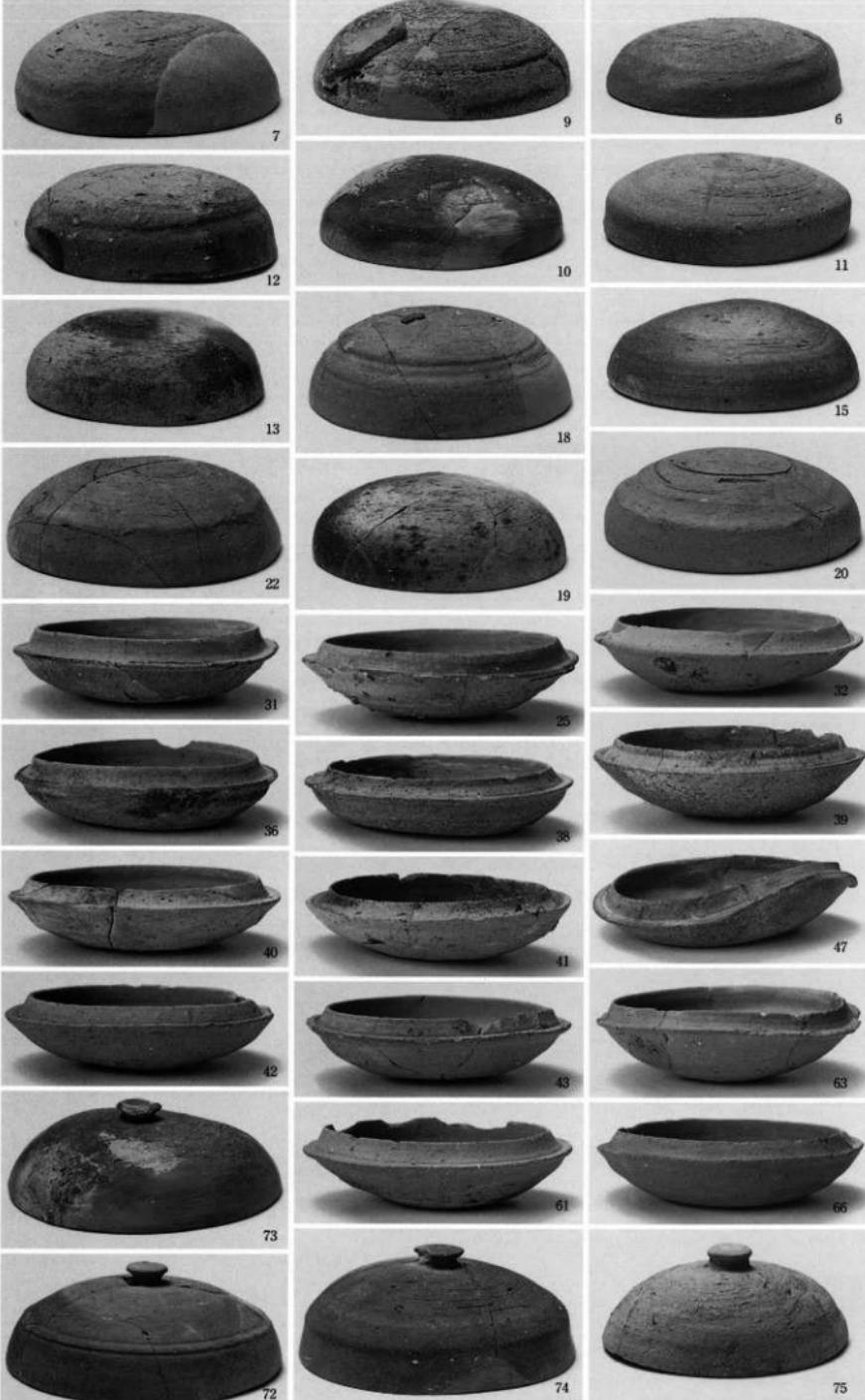
土坑134 (灰より)



土坑401 (灰より)

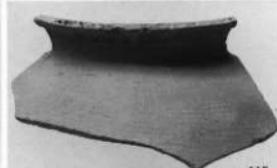
図版8
2区
遺物(1)

土坑100
(全)



図版9
2区
遺物(2)

土坑100
(全)





3、4、5区全景（西から）



3区全景（北から）



3区全景（北から）



3区全景（北から）



3区 溝2土器群1（南から）



上：3区 溝2 土器群1（南から）

下：同上 遺物廃棄状況（北から）

上：3区 溝2 土器群2（北から）

下：3区 土坑13遺物出土状況（東から）

図版13

3・4・5区



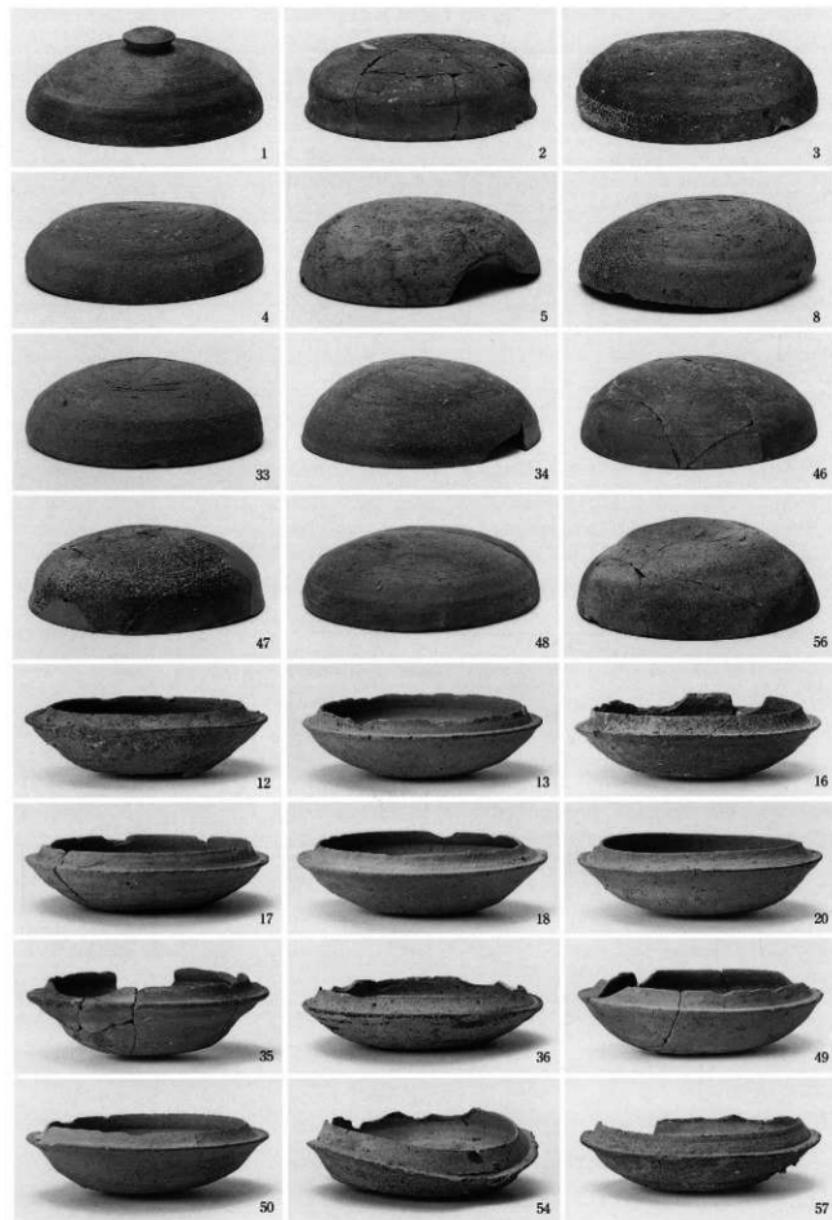
4区全景（南から）



5区全景（南西から）

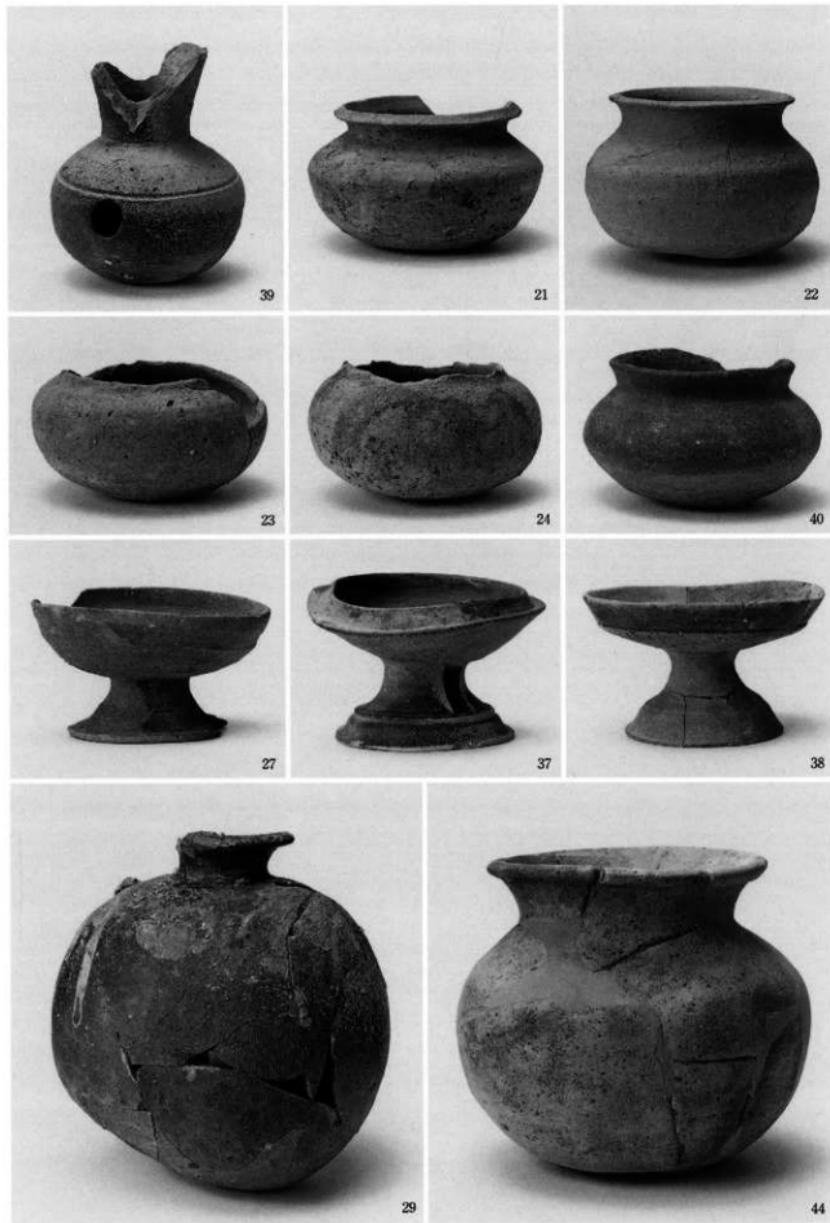
図版 14

3区 出土遺物



図版 15

3区 出土遺物





25



26



43



55



28



42



30

41

